

はじめに

——サンクチュアリ教会側の主張は、「反対派」と同じ霊的背景をもっている？

今まで本部は、「反統一教会活動をしてきたいわゆる「反対牧師」の批判に対し、長年にわたって対応してきましたが、最近、真のお母様や教会本部を批判する「サンクチュアリ教会」側の主張を見ると、その内容は、反対派が行ってきた批判および言動と不思議なほどに類似しており、同じ「霊的背景」を感じるものです。

① 教祖は淫乱である？

反対牧師らは、長年にわたって「文鮮明は、血分け」を実践し、六マリヤどころか六十マリヤがいる」などと教祖批判をし、それを真に受けた信者を脱会させてきました。

しかし、真のお父様は、『六マリヤ』だなんだという朴正華の言葉は、すべてうそです」(マルスム選集三〇六―二四一)と語っておられ、六マリヤを否定しておられるのみならず、ご自分の人生を「モデルとしての絶対『性』の完成のための人生」(『平和神経』二五九ページ)であったと回顧しておられます。事実、『六マリヤの悲劇』の著者である朴正華氏は、その後、著書『私は裏切り者』で、『六マリヤの悲劇』の内容はねつ造であり、虚偽であったことを告白し、各地で報告会を行って自らの行動を謝罪しています。

にもかかわらず、サンクチュアリ教会では、『六マリヤ』が当然あったかのように主張しており、その言動は反対派の批判と通じるものがあります。「六マリヤ」を語る彼らの言説は、お父

様が説かれるみ言や「純潔」の教えから完全に逸脱しています。

② 「怨み晴らし」を動機としている？

反対牧師らは、真のお父様を批判するとき、「文鮮明は日本に對し怨みを抱いており、それを動機にして日本人に高額献金を要求するなど、怨みを晴らそうとしている」と言って批判してきました。しかし、実際のお父様は、日本の国の将来を考え、その繁栄を願ってこられたのであって、反対派の批判は全く的外れなものです。

最近、サンクチュアリ教会側が行う真のお母様批判は、「お母様はお父様に対して怨みをもっており、その怨みを晴らそうとしている」かのように主張しており、反対派の手法と似たものを感じます。

しかし、実際のお母様のお姿は、すべてのものを愛し許され、怨讐をも包み込むものです。その事実について、真のお父様は「お母様はりっぱな女です。……お母様として自分の責任分担をすべて果たしたのです。それがあるがたいのです」(『ファミリー』二〇〇六年九月号、三一ページ)と語っておられ、お母様が常に「怨讐関係」の立場にあるような人をも愛され、生活してこられたことを証しておられます。

③ み言と矛盾する内容を語っている？

二千年前、ユダヤ教指導者らがイエス様やその弟子たちを批判するとき、「聖書(旧約聖書)の律法と矛盾したことを教えている」、「聖書からの聖句の引用が間違っている」等々と批判してきました。

現代においても、反対牧師らは、「統一教会(現、家庭連合)は聖書(新約聖書)の福音と矛盾したことを教えている」、「聖

句の引用が間違っている」等々、同様な批判を展開して、信者を脱会説得してきました。

最近、サンクチュアリ教会側が行っている批判も、「お母様や家庭連合本部は、お父様の^{ことば}み言と食い違うことを教えており、八大教材・教本『天聖經』（成約聖書）さえも廃棄し、それらの教えと異なる道を行っている」と事実と反することを述べるなどし、「家庭連合から早く脱会するように」と勧めています。このような言動は、反対派が行ってきた脱会説得の手法を彷彿させるものです。しかし、本論の内容を読むと分かるように、彼らの批判は、全く的外れです。

④ 教会の幹部は腐敗・墮落している？

反対派は、「統一教会の幹部は公金横領をし、自己保身するいかかわしい人物が多い」と言って批判してきました。その批判を真に受けて脱会し、本部に「脱会届け」を郵送してきた元信者も多くいました。

最近、サンクチュアリ教会側が行っている家庭連合本部の批判は、驚くほどこの反対派の手法と似たものを感じさせます。

最近では拉致監禁を伴った脱会説得事件がめっきり減ってしまい、効果的に「天の摂理」を妨害できなくなった反対牧師の背後にいた「霊的背景」が、今や「サンクチュアリ教会」側の人々を使って、少しでも天の摂理を遅らせようと画策しているかのようです。

これまで反対派は、前述したような批判内容を「拉致監禁」という特殊な環境下で信者に無理矢理聞かせ、脱会させてきました。それらと同じ内容、同様の手法が、真の子女様という内部の装いをもって今、私たちに忍び寄ってきているのです。それ

ゆえ、「防衛しよう」とする内的姿勢もない状態のなか、「拉致監禁」による脱会説得法と同じか、あるいはそれ以上の効果をもたらした信者を脱会させているのです。

真のお父様は、「真の父母」というのは一組しかいないのです。人類の一組しかいない父母だということです。歴史に初めて登場した、空前絶後の真の父母が顕現した時代が成約時代だということです」（八大教材・教本『天聖經』二四〇〇ページ）と語っておられます。

このように、「空前絶後」の真の父母様、すなわち「文鮮明・韓鶴子ご夫妻」こそが、唯一の「真の父母」であり、唯一の救い主です。その唯一の「真の父母」から引き離そうというサンクチュアリ教会側の巧妙な手法は、サタンの手法そのものです。

今や、「真の父母」というのは一組しかいないのです」と語られた真のお父様の^{み言}みに反して、彼らは、子女様を「第二の真の父母」に担ぎ上げようとしているため、このまま行けば、「偽キリスト」「偽りの父母」となり、統一原理の教え、真の父母様の^{み言}の真髄である「真の父母」を破壊しかねないと危惧するものです。

このような非原理集団「サンクチュアリ教会」等の言動に惑わされ、「空前絶後」の真の父母様である「文鮮明・韓鶴子ご夫妻」のもとを離れないよう、私たちは十分に気をつけなければなりません。天一国の「絶対中心」は天の父母様と真の父母様です。そして、天の父母様、真のお父様の願いは、統一原理、真の父母様の^{み言}を正しく理解し、「真の父母」が顕現されたことを七十四億人類に知らせ、真のお母様を中心に「教えの正道」を歩むことなのです。

二〇一七年二月九日

目次

はじめに／1

一、サンクチュアリ教会を支持する李鎬宅氏の言説の誤り／4

(1) 李鎬宅氏の言説「アブラハム、イサク、ヤコブ路程を歩むのが真のお父様である。その後、ヨセフ路程を歩むのが亨進様であり、さらにエフライム路程を歩むのが信俊様であることが、神によって予定されている」の誤り／4

(2) 李鎬宅氏の言説「ヤコブが九十歳の時にヨセフがエジプトの総理大臣になったように、真のお父様は九十歳の時に、三十歳の亨進様を相続者として立てられた」の誤り／6

(3) 李鎬宅氏の言説「ヨハネの黙示録の一章を見ると、真のお父様が九十三歳で聖和されることが預言されている」の誤り／7

(4) 李鎬宅氏の言説「清平役事が一九九五年から出発したが、そのときから統一教会は発展するのではなく、滅びていくようになった」の誤り／8

(5) 李鎬宅氏の言説「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が続することについて書かれているところはない。真のお母様は、女王ではない」の誤り／9

(6) 李鎬宅氏の言説「お父様が二〇一三年一月十三日を基元節に定めた理由は、アダムからノアの洪水審判までが千六百五十六年であり、その年数に韓国歴史の檀紀をプラスすれば、六千一年になるからだ」の誤り／10

(7) 李鎬宅氏の言説「お父様が清平の二百十代の先祖解怨を指示されたのは、洪水審判まで二百十代になるからだ。アダムまで遡ると二百二十代にしかないのに、清平が四百二十代の解怨を推奨するのはおかしい」の誤り／12

二、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り／14

(1) 「メシヤ」と「真の父母」の概念について——真のお母様もメ

シヤである／14

(2) 「メシヤの血統は文氏であって韓氏ではない」という批判への応答——不正確な血統理解に基づく批判／16

(3) 独自の「祝福式」を行っている問題に対する応答——血統伝授は父母だけの特権／18

(4) 「真のお母様は、真のお父様と一体となっていない」という批判への応答／19

(5) 「真のお母様は完成しておられない」という批判への応答／21

(6) 真のお母様が真のお父様の椅子に座られたことに対する批判への応答／22

(7) 四位基台の図で、アダムとエバの位置が逆転している問題——これは、主権性転倒を意味するものではない／22

(8) 「私を教育した人は誰もいません……私が決心したのです」の意味について／25

(9) 八大教材・教本『天聖經』を改竄したという批判への応答／26

(10) 「聖婚問答」を変えたという批判への応答／28

(11) 神様の呼び名を、「天のお父様」から「天の父母様」に変えたという批判への応答／29

(12) 天一国の歌を変えたという批判への応答／31

(13) 「天基元年」を「天一国元年」に変えたという批判への応答／31

(14) 「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が相続すると書かれたところはない」という批判への応答／33

(15) 「二〇一三年、基元節の祝福指輪には、お母様の名前だけが刻まれている」という批判への応答／34

(16) 「漢南洞の父母様の写真を全部下ろして、お母様の写真だけを掲げさせた」という批判への応答／35

(17) 「家庭連合」のマークに対する批判への応答／36

(18) その他の批判を含めて、総合的に留意すべきこと——真のお父様のご意向／37

一、サンクチュアリ教会を支持する李鎬宅氏の言説の誤り

二〇一五年七月二十八日付で、日本統一教会（現、家庭連合）元会長の江利川安榮氏が「退会届」を郵送してきました。そこには、文亨進様を中心とした米国のサンクチュアリ教会の下で、日本サンクチュアリ協会総会長兼協会長として出発するとありました。

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。これらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、誌面の都合上、文字数の制限があるために、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト (<http://trueparents.jp/>)」をご覧ください。

（教会成長研究院）

注：本文中、真の父母様のみ言および『原理講論』の引用は、網掛けの文字で区別しています。

サンクチュアリ教会を支持する人物である李鎬宅氏（三万双、天正宮博物館で六年間勤務）が、二〇一五年七月十四日に「摂理的同時性からみた危機的状況とその対策」という動画を公開しました。その動画で彼は、「亨進様を中心に祝福家庭が一つとなって摂理を進めていくようにしなければ世界に危機が訪れる」と主張しています。

このような主張は、真の父母様を「絶

対中心」として歩んでいかなければならない天のみ旨に對して、大きな妨げとなるものです。

『原理講論』に、『天国は神の本性相と本形状のとおり、個性を完成した人間一人の容貌に似た世界である……天国においては、神の命令が**人類の真の父母**を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かつて動じ静ずるようになるの

である』（六九ページ）と記されているように、**真の父母様を中心とした理想世界**である「天一国」を取り戻していくというのが、神様の復帰摂理です。李鎬宅氏はみ言中心主義を装っていますが、その言説には誤りが多く含まれています。

（1）李鎬宅氏の言説「アブラハム、イサク、ヤコブ路程を歩むのが真のお父様である。その後、ヨセフ路程を歩むのが亨進様であり、さらにエフライム路程を歩むのが**信俊様**であることが、神によって予定されている」の誤り

復帰摂理歴史に現れた中心人物たちの歩んだ路程を、将来、来られるメシヤが歩む模擬路程、象徴路程として捉えるのは、正しい摂理観です。

ところが、李鎬宅氏は、ヤコブ路程やヨセフ路程をメシヤに当てはめるのみならず、それを真の子女様にも当てはめ、メシヤが歩む路程以降の摂理を、神が前もって子女様に対しても予定していると主張します。彼は、アブラハム、イサク、ヤコブ路程を歩むのが真

のお父様であり、亨進様はヤコブ路程の続きであるエジプトで歩んだヨセフ路程を歩むと説きますが、これは誤りです。

『原理講論』は、ヨセフ路程について次のように述べています。

「彼（ヨセフ）が三十歳になりエジプトの総理大臣になったのち……兄たちと父母とがエジプトを訪ねてきて彼に屈伏した……。ヨセフのこのような路程は、将来イエスが来られて、苦難の道を通じて、三十歳で王の王としてサタン世界に君臨されたのち、全人類はいうまでもなく、その祖先たちまでも屈伏させ、サタンの世界から分立して天の側に復帰するということを、見せてくださったのである。このようなヨセフの全生涯は、とりもなおさず、**イエスの模擬者**としての道を行く歩みであった」（三五二～三五二ページ）

ヤコブ路程もヨセフ路程も、どちらもメシヤであるイエス様が歩む模擬路程であって、ヤコブ路程をイエス様が歩み、その後、イエス様の相続者がヨ

セフ路程を歩むというのではありません。アブラハム、イサク、ヤコブ、さらにヨセフも、彼ら全員の歩みが、将来、来られるメシヤが歩む道を準備するための模擬路程、象徴路程であることを知らなければなりません。

ところで、真のお父様は、第二次世界大戦後、キリスト教の不信によって苦難の道を歩まれました。しかし二〇〇一年四月十八日、「米国五十州巡回講演」において米国牧師が真の父様と一つになった勝利基準が立ったとき、お父様は、再臨主の行く道について次のように語られました。

「偽りの父母から血肉を受け継ぐことによつて、亡国の環境となつてしまつたサタン世界の霊界と肉界を、どのようにに修理するかということですよ。それは、修理すべき責任を持った、真の父母」という人が来て、神様のように数千年間かけて役事するのではありません。**アダムが一代で完成することができなかつたので、（先生）一代で解決しなければなりません。**ですから、それは、どれほど途方もないことでしょ

うか？」（「ファミリー」二〇〇一年六月、九ページ）

「歴史を一代で解決しなければなりません。一代ですのです。分かりますか？ **何代ではありません。先生一代で解決しなければなりません。**アダム家庭が、一代で勝利できなかったことを歴史的に総蕩滅（とうげん）して、先生一代で整備しなければならぬのですから、それが、どれほど途方もないことであるかということを考えてみてください」（同、二三ページ）

真のお父様は、「アダムが一代で完成することができなかつたので、一代で解決しなければなりません」とはつきり語っておられます。

また、終末とは、『原理講論』に書かれているように、メシヤが地上に降臨されたときに起こる善悪交差の時です。それは、メシヤが降臨された「一点」において交差するのであって、何代かにわたって行われる摂理ではありません。正に真のお父様が、「一代ですのです。分かりますか？ 何代ではありません

ません」と明言しておられるとおりです。

アブラハム、イサク、ヤコブの路程は、真のお父様が歩み、その続きであるヨセフ路程を亨進様が歩むという李鎬宅氏の摂理観は、完全な誤りであり、お父様のみ言および「原理」の内容に反するものです。

(2) 李鎬宅氏の言説「ヤコブが九十歳の時にヨセフがエジプトの総理大臣になったように、真のお父様は九十歳の時に、三十歳の亨進様を相続者として立てられた」の誤り

李鎬宅氏は、「ヤコブが九十歳のとき、ヨセフが三十歳でエジプトの総理大臣になったように、お父様が九十歳のときに、三十歳の亨進様を相続者として立てられた」と主張します。これは、お父様のみ言や聖書の年数に何の根拠も持たない誤った言説です。

聖書の創世記に記述された年数は、『原理講論』に「象徴的同時性の時代」と表現されているように、象徴的に現れた年数です。聖書（創世記）に書か

れた年数をそのまま計算すると、象徴的同時性である百二十年、四十年、二十一年、四十年という数理的期間が出てきます。【7ページの「アブラハム・ヤコブ路程の『摂理的同時性』の年数」を参照のこと】すなわち、アブラハムの召命からヤコブが祝福を受けるまでが百二十年であり、ヤコブとエサウの対立期間が四十年。ヤコブがハランに行って苦役する期間が二十一年、ヤコブがカナンに帰った後、エジプトに行くまでが四十年になります。

聖書に出てくる年数によれば、ヤコブが九十一歳のとき、ヨセフが生まれ、さらにヤコブが九十七歳のとき、カナンの地に帰還し、ヤコブが百三十歳のとき、エジプトに移住して百四十七歳のときに亡くなった計算になります。ところが、真のお父様は、ヤコブが二十一年間のハラン苦役路程を終え、カナンの地に帰還して兄エサウを屈伏させ、実体基台を勝利した実際の年齢は、四十歳であったことを次のように語っておられます。

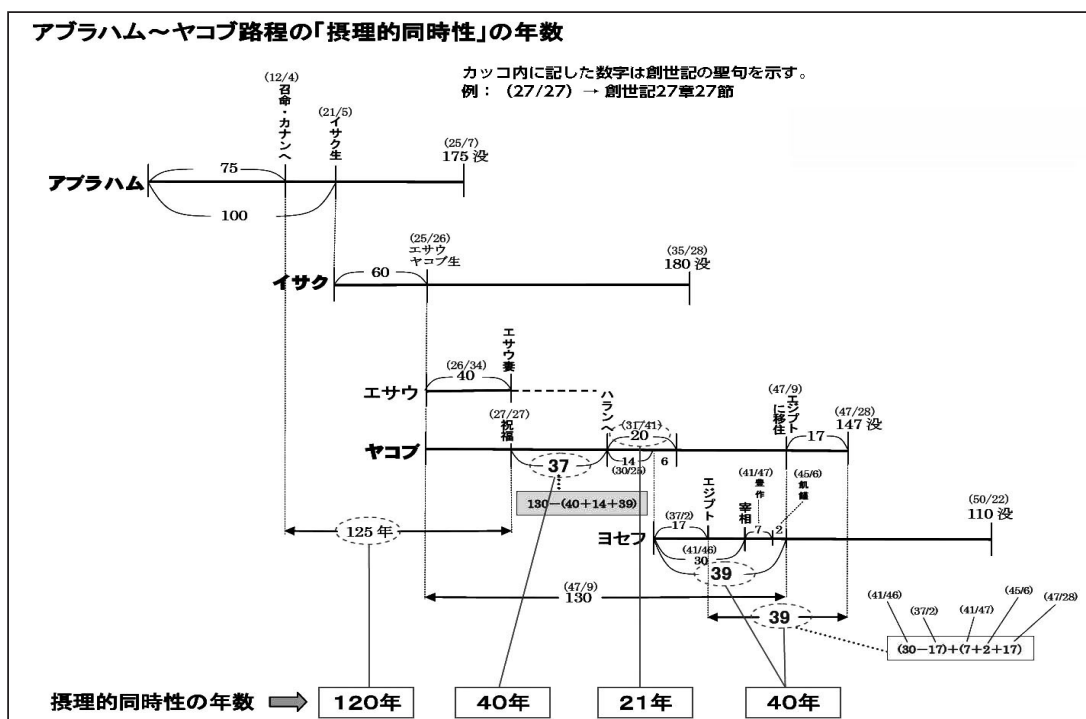
「二十一年が過ぎて、ヤコブが家に

帰つて来たとき……エデンの園におけるカインとアベルの関係を、ヤコブは兄エサウとの関係において、勝利しました。……ヤコブが長子権を獲得したのは、四十歳の時でした」(「ファミリー」一九九六年六月号、三七ページ)

このみ言で分かるように、創世記(聖書)に記された年数は、あくまでも摂理的同時性に基づいて歴史が導かれていることを人類に教えるために記された象徴的な数字です。

ヨセフは、ヤコブが二十一年のハラシ苦役をしている時に生まれた息子であるため、実際の年齢で言えば、六十歳で生んだということはありません。それにもかかわらず、李鎬宅氏は、「ヤコブが六十歳のとき、ヨセフが生まれたのと同様に、真のお父様が六十歳のとき、亨進様が生まれた」と語っています。また、創世記(聖書)に出てくる象徴的数字で計算しても、ヤコブが九十一歳のとき、ヨセフが生まれた計算となります。

結局、真のお父様のみ言から見ても、聖書に書かれた年数から見ても、李鎬



[120年] アブラハムは75歳で神の召命を受け(創12・4)、100歳でイサクを生んだ(創21・5)。イサクは60歳でエサウとヤコブを生み(創25・26)、そしてエサウは40歳で結婚(創26・34)。その直後、ヤコブは祝福される。(100 - 75) + 60 + 40 = 125年

【40年】 ヤコブが40歳で祝福を奪った後のエサウとの「対立期間40年」の計算の仕方は、ヤコブがエジプトへ移住するのは130歳(創47・9)であった。そのヤコブがラケルのために働いた14年が過ぎる頃、ヨセフが生まれた(創30・25)。そのヨセフは、エジプトへ売られ、30歳で宰相となり(創41・46)、豊作7年(創41・47)の後、飢饉2年目にヤコブがエジプトに移住した(創45・6)。130 - (40 + 14 + 30 + 7 + 2) = 37年

【21 年】 ヤコブはラバンに 20 年仕えた（創 31・41）。苦役を終えて 21 年目にカナンに。

【40年】①エジプト移住までの準備期間40年の計算は、ヨセフの誕生時から準備期間が始まったと考えたと、エジプトに売られたヨセフは30歳で宰相に(創41・46)。豊作7年(創41・47)、飢饉2年目にヤコブがエジプト移住(創45・6)。30 + 7 + 2 = 39年

②ヨセフがエジプトに売られた時から準備期間が始まったと考えたと、17歳で売られたヨセフは(創37・2)、30歳で宰相に(創41・46)。その後、豊作7年(創41・47)、飢饉2年目にヤコブは一族を連れてエジプトに移住(創45・6)。ヤコブは17年間、エジプトで生活し(創47・28)、氏族基盤を定着させて死んだ。(30 - 17) + (7 + 2 + 17) = 39年

李鎬宅氏は、ヨハネの黙示録を恣意的に解釈し、ヨハネの黙示録一一章に、「真のお父様が九十三歳で聖和ソニアすることが預言されている」とします。すなわち彼は、お父様が二〇〇九年の九十歳で、三十歳の亨進様を相続者として立てたので、そこから三年半の間である四十二か月を数えた九十三歳で聖和することになったのだとします。

しかし、『原理講論』は、李鎬宅氏が引用している黙示録一章二節の直前にある黙示録一〇章11節「あなたは、

宅氏の言説は、でたらめであるという事実が分かります。

当然、李鎬宅氏が主張する「ヤコブが九十歳のときにヨセフがエジプトの総理大臣になったように、真のお父様は九十歳のときに、三十歳の亨進様を相続者として立てられた」という言説は、み言や聖書に根拠のない誤りです。

(3) 李鎬宅氏の言説「ヨハネの黙示録の二一章を見ると、真のお父様が九十三歳で聖和されることが預言されている」の誤り

もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、「預言せねばならない」という聖句を、再臨主が「原理」を解明して発表されることとして解釈しています（参照…一七二ページ）。

また『原理講論』は、李鎬宅氏^{イホテグ}が引用する直後の黙示録一章15節「この世の国は、われらの主とそのキリストとの国となった」を、キリストの顕現として解釈しています（参照…四九〇ページ）。したがって、李鎬宅氏のように黙示録一章2節から14節を、お父様の「聖和」^{ソフ}を預言する聖句として解釈するには無理があり、その預言は、むしろ再臨主が迫害され「苦難の道」を歩まれるが、それを乗り越えて勝利されることを意味する聖句として解釈することが、『原理講論』の解釈および摂理観と一致すると言えます。

また、黙示録一九章に「小羊の婚宴」が記述されていますが、真のお父様は「アダムとエバがエデンの園で夫婦になることができなかったことを、歴史時代を通して克服し……真の父母を再現するその祝宴が『小羊の婚宴』です」（八大教材・教本『天聖經』二一九二ページ）

と語っておられ、それが一九六〇年の「聖婚式」を示すものとして解釈できます。

李鎬宅氏は、黙示録一章2節からの聖句を「聖和」の預言だとはしますが、その後の黙示録一九章に一九六〇年の「小羊の婚宴」を預言する聖句がある事実を考察すると、彼の黙示録解釈は、聖和と聖婚式を逆転させた、つじつまの合わない解釈であると言わざるをえません。

（４）李鎬宅氏の言説「清平役事^{ジョンピョン}が一九九五年から出発したが、そのときから統一教会は発展するのではなく、滅びていくようになった」の誤り

李鎬宅氏は、「三十六万双の祝福式が行われた一九九五年が、統一教会が最も発展したピークの時であり、それ以降、統一教会は発展するのではなく、滅びていくようになった。その一九九五年は、清平役事が始まった年である。清平役事は決して良かったとは言えない」と、清平に対して批判的に述べます。

しかし、清平を聖地として定められたのは真のお父様ご自身です。お父様

は、一九六九年から清平で精誠条件を立てられ、清平に基盤を築いていく歩みをされました。その清平に対し、次のように語っておられます。

「清平の地は、世界の祖国の地、全人類の心情的故郷の地にならなければなりません。天地が仰ぎ得る勝利的創造理想を完成させ、天地が連結されて神様の心情を解^{かい}怨^{おん}成就できる地になるだけでなく、世界の故郷の地になり得る神聖な土地になることを祈ってきたのですが、これが本格的に出発できる時点に達しました。……今、世界百八十五カ国に私たちの基地がありますが、父母様の願いは、ここ（清平）をその百八十五カ国のあらゆる歴史的伝統を展示できる歴史的な基地にすることです。それだけでなく、この基地で……天との関係をどのように結ぶかを教える修練所、教育場所を用意するのです。そのようにするために準備した土地として祈っていたことが、そのまま歴史的な事実として連結され得るようになりました。このような世界版図を統一教会がもつたことは、驚くべ

き勝利の結果であると考えているので
す」(『真の父母經』四二九ページ)

真のお父様は、清平を「創造理想を
完成させ、神様の心情を解怨成就でき
る地」「世界の故郷の地」「天との関係
をどのように結ぶかを教える修練所、
教育場所」として準備したと語ってお
られます。そして、真の父母様と米国
牧師が一つになった基準を立てたとき、
お父様は次のように語られました。

「摂理史を知らなければなりません。
……一代でこれを合わせなければなり
ません。皆さん。今(二〇〇一年)か
ら十二年残っています。皆さんの国を
復帰しなければなりません。……です
から、先生は八十歳になるときまで、
どれほど忙しかったでしょうか？ 統
一教会は、九七、八年から上がり始めた
のです」(『ファミリー』二〇〇一年六
月号、二〇ページ)

真のお父様は、統一教会は一九九七
年、九八年から上がり始めたと言明し
ておられます。

真のお父様の認識と、「清平役事が
一九九五年から出発したが、そのときか
ら統一教会は発展するのではなく、滅び
ていくようになった」と語る李鎬宅氏の
認識は、大きくかけ離れたものであり、
一致していません。彼の説く摂理観は、
お父様のみに根拠を持たない誤った言
説であると言わざるをえません。

(5) 李鎬宅氏の言説「聖書の中に、
メシヤが亡くなった後で、女性が続す
ることについて書かれているところはな
い。真のお母様は、女王ではありえない」
の誤り

李鎬宅氏は「聖書の中に、メシヤが
亡くなった後で、女性が相続することに
ついて書かれているところはない」と述
べますが、このような主張は、聖書に
対する、無知が生み出した誤りです。
聖書には、イエス様が十字架で亡く
なった後、霊的眞の母である「聖霊」
(参照：『原理講論』二六五ページ)が
信徒たちを導いて指導していくことに
ついて記されており、しかも「聖霊に
よらなければ、だれも『イエスは主で

ある』と言うことができない」(コリン
トI・二・3)とあります。このように、
十字架の後、霊的眞の母である聖霊が、
信徒を導いてきたのです。

イエス様は十字架で亡くなる前、十
字架と復活の後に、聖霊(霊的眞の母)
が信徒を導くことについて、次のよう
に語っておられました。

「父は別に助け主を送って、いつまで
もあなたがたと共におらせて下さるで
あらう。……助け主、すなわち、父が
わたしの名によってつかわされる聖霊
は、あなたがたにすべてのことを教え、
またわたしが話しておいたことを、こ
とごとく思い起させるであらう」(ヨハ
ネ一四・16-26)

イエス様の預言どおり、ペンテコス
テの日に聖霊が降臨し、それ以降、イ
エス様と共に聖霊がクリスチャンを導
いていくようになりました。

「原理」が教えているように、霊的眞
の母である「聖霊」を通じてこそクリ
スチャンは、霊的重生ができるのです。
前述したように、聖書には、「聖霊に

よらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」とあり、さらに「聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである」（テトス三・5）とも書かれています。

このように「重生」の役事は、真の父だけで成されるのではなく、**必ず真の母を通じなければなりません**。ゆえに、イエス様は、「人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」（マタイ二一・32）と警告しておられます。真の母を重んじなければならぬのです。

ところで、イエス様は、地上での肉身生活において、実体の真の母を復帰することができませんでした。真のお父様は次のように語っておられます。

「イエス様も、もし結婚して相対理想を成していたならば、亡くなられたり
はしませんでした。殺すことはできな
いというのです。これは、相対理想の
直接主管圏に連結することができ、原
理で言えば、責任分担を完成した基準

になるので、直接主管圏内に入ってい
くのです」（「ファミリー」二〇〇一年
三月号、二一ページ）

イエス様は、地上において「真の母」
を立てることができず、十字架で亡く
なりました。そのため、**原罪を清算す
る道を開くことができませんでした**。

そして、十字架と復活の後、霊的真的
母である聖霊と共に「霊的重生」の役
事だけを行うようになったのです。新約
時代は、霊的救いのみで終わりました。

しかし、再臨主であられる真のお父
様は、**実体の「真の母」を復帰され、
原罪を清算する道を開かれました**。そ
れゆえ、成約時代、天一国時代を迎え
ることができたのです。「重生」の役事
をなしうるおかたは、**文鮮明・真のお
父様と、韓鶴子・真のお母様以外
にはおられません**。

また、真のお父様は、「皆さん、男性
に尋ねれば『王になりたい』と答え、
また女性に尋ねれば『女王になりたい』
と答えるでしょう？ いったいそれは
どういうことでしょうか。本来のアダ
ムとエバは、王であり、女王だったと

いうことです」（八大教材教本『天聖經』
二三二〇ページ）と語っておられ、完
成したアダムが「王」であるなら、そ
の相対であるエバは「女王」であると
語っておられます。

李鎬宅氏の言説は、真のお父様のみ
言や聖書の教えと食い違っていること
が分かります。

（6）李鎬宅氏の言説「お父様が
二〇一三年一月十三日を基元節に定めた
理由は、アダムからノアの洪水審判まで
が千六百五十六年であり、その年数に韓
国歴史の檀紀をプラスすれば、六千一年
になるからだ」の誤り

李鎬宅氏は、聖書に出てくるア
ダムからノアの洪水審判までの
千六百五十六年の年数と、韓国歴史の
檀紀四三四年（西暦二〇一三年）を
つなぎ合わせて計算し、「人類歴史は
二〇一二年をもって六千一年になる。そ
れゆえ、真のお父様は二〇一三年を『基
元節』に定めたのだ」と主張します。
しかし、これは「木に竹を接ぐ」よう
な言説であり、歴史の進展には、人間

の責任分担が関わっていることを無視した、誤った言説です。

ノアの洪水審判までの千六百五十六年と、檀紀の四三四年を足して、人類歴史が六千年の復帰摂理の終わりを迎えるというなら、二千年前、イエス様が地上で「真の母」を復帰できず、勝利できないことが初めから決定されていたと言わなければなりません。そこには、人間の責任分担があったのであり、当時のユダヤ民族が責任を果たせば、イエス様が十字架で亡くなることはなく、そのときに復帰摂理は終わっていました。

ところで、十八世紀頃までの時代は、聖書に記された年数をそのまま信じ、それに基づいて人類歴史を考察する、いわゆる「聖書年代学」が盛んでした。英国国教会のジェームス・アッシャー大主教（一五八一―一六五六）は、聖書の年数計算に基づいて「天地創造はBC四〇〇四年である。ノアの洪水はアダムから千六百五十六年である」と計算し、人類歴史を約六千年と主張しました。しかし、その年数計算は、イエス様の死後、約六十年を経たAD九〇年頃のヤムニヤ会議で定められた

ヘブライ語正典に基づいて計算された年数にはなりません。

実は、イエス様当時の初代教会で広く読まれていたギリシャ語訳の旧約聖書「七十人訳聖書」の年数表記は、ヘブライ語正典とは異なっており、アダムからノアまでが二千二百五十六年となっていました。この七十人訳聖書の流れを汲むのが、カトリック教会の聖書です。

シトー派修道会の院長を務めたポール・ペズロン（一六三九―一七〇六）は、七十人訳聖書の年数に基礎をおいて、アダムからイエス様までの歴史を五千八百七十三年と計算しました。七十人訳聖書では、アダムからイエス様までで約六千年となっていたのです。ところで、真のお父様は、聖書の約六千年という年数表記に対し、何度も次のように語っておられます。

「人間が墮落してから今に至るまでの救援摂理歴史というものは、六千年ではありません。何千万年です。そのことを知らなければなりません」〔ファミリー二〇〇一年六月号、八ページ〕

真のお父様が、「人類歴史は六千年ではない」と語られたみ言は数多くあります。六千年ではないと何度も強調して語ってこられたお父様が、現在用いられている聖書に書かれたアダムからノアの洪水審判までの年数の千六百五十六年と、檀紀四三四年という端数のある数字を合算し、あえて六千年という数字にこだわって「基元節」を決められたと主張するのは、実に奇妙な話であると言わざるをえません。

ところで、真のお父様は、二〇〇四年七月八日の第九回「安侍日^{アンサイル}」に、次のように語っておられます。

「イエス様が失敗していなければ、イスラエル国を立てていたのと同じように、先生が生涯を通して、境界線を解放しておかなければなりません。しかし、今（数えの）八十五歳ですが、八十歳でカナンを復帰して天下統一をしなければならなかったにもかかわらず、それができなかったのです。……まだアベル・カインが残っているの

で、第二次の祝福を受け、アベル・カインの撤廃を宣布したのです。そして、今から百二十年（百二十歳）になる時までに、すべてを終えなければなりません。……それを管掌する先生は、最初の四十年、八十歳までの四十年、今の四十年を、それぞれ四年として、二〇〇一年から二〇一二年まで、九十二歳を中心とする二〇一二年までにすべてを終えるのです」（『後天時代と真の愛の絶対価値』二五五ページ）

このみ言で分かるように、本来、二〇〇〇年までに終えるべきだった摂理を終えることができなかったため、一九二〇年から六〇年までの四十年を第一次四年路程とし、次に一九六〇年から二〇〇〇年までの四十年を第二次四年路程とし、さらに二〇〇一年から二〇四〇年までの四十年を第三次四年路程として、失敗も延長もなかった基準を蕩減復帰することを目標に設定されたのが、二〇一三年（天曆）一月十三日の「基元節」です。

すなわち、二〇〇一年一月十三日の「神様王権即位式」から二〇一三年（天

曆）一月十三日までの十二年を経て「基元節」を迎えるというのが、真のお父様ご自身の説明です。

李鎬宅氏の語る摂理観は、真のお父様のみに言に根拠を持たない誤った摂理観です。

（7）李鎬宅氏の言説「お父様が清平の二百十代の先祖解怨を指示されたのは、洪水審判まで二百十代になるからだ。アダムまで遡ると二百二十代にしかないのに、清平が四百二十代の解怨を推奨するのはおかしい」の誤り

李鎬宅氏は、聖書に記された年数を文字どおり信じる立場から、「アダムまで遡っても二百二十代にしかならないのに、清平（韓国）が四百二十代の先祖解怨を推奨しているのはおかしい」と述べ、清平役事を批判します。しかし、前述したように、真のお父様は、人類歴史は六千年ではないと明確に語っておられます。

真のお父様が、人類歴史は六千年ではなく、実際はもっと長い年月であると語っておられることから考えれば、

四百二十代の先祖解怨を推奨することは、何らおかしいことではありません。ところで、李鎬宅氏は、文亨進様こそが摂理の中心存在であるかのように主張しています。しかし、人類歴史における永遠の中心存在は「真の父母」です。真のお父様は、次のように語っておられます。

「人類の真の父母が現れることが歴史の願いであり、国家の願いであり、思想の願いであり、摂理の願いです。それで真の父母が現れる時は**歴史上に一度しかない頂点を成す時**であり、空前絶後の時なのです」（八大教材・教本『天聖經』二〇〇三ページ）

「真の父母は、永遠に一組しかいません。アダムとエバ、最高の先祖は、二組ではなく、一人の女性と一人の男性です。彼ら人間の先祖が真の父母にならなければならなかったのですが、墮落することによって偽りの父母となりました。ですから、絶対的な父母を再び探し出さなければ、神様の創造理想を実現することはできません。このよ

うな論法に照らしてみれば、愛し合う新郎と新婦を中心とした真の家庭、真の理想国家、真の理想世界をつくらうという内容を教えてくれる宗教でなければ、真の宗教ではありません。真の宗教とは、**真の父母が現れなかったので、真の父母が現れてこそ、真の家庭を築くことができるという理論をもった宗教です**」(一九九四年三月十四日)

真のお父様はこのように、「真の父母」は永遠に一組しかない、空前絶後の真の父母であると語っておられます。人類は、どこまでも**真の父母を中心**に**一つになるべき**であって、その他のいかなる人物も、真の父母に代わることはできません。真の子女様も、真の父母に侍_はつて一つになつていかなければならないのであって、真の父母様が子女様に合わせるものではありません。李鎬宅氏の言説は、人類が「**真の父母**」を中心に永遠に一つになつていこうとする道を阻んでしまう、偽りの言説と言わざるをえません。

また、真のお父様ご自身は、復帰摂理の完成を「**自分一代で成し遂げな**

ればならない」と語られ、そのみ言のとおり、二〇一〇年天曆五月八日と同月十五日の二度にわたつて米国・ラスベガスで、真の父母様の「**最終一体**」を**宣布**しておられます。そして、聖和_{ソニフ}される最終の祈禱では「すべて成し遂げました」と宣布しておられます。

それにもかかわらず、李鎬宅氏は、まるで真のお父様が使命半ばにして、未完のまま聖和されたかのように主張しています。

私たちは、李鎬宅氏が説くような偽りの言説に惑わされないようにしなければなりません。

二、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り

サンクチュアリ教会側の人々は、二〇一五年九月頃まで、李鎬宅^{イホテク}氏の映像や言説を用いながら勧誘活動を行っていました。しかし、家庭連合本部は、その言説が真のお父様のみ言や『原理講論』と食い違っており、誤りであることを明確にしたところ、その後、彼らは手を替え品を替えるかのようにして、以下の内容をもって家庭連合をさまざま批判し、勧誘活動をするようになりました。彼らの批判内容の誤りを以下、順次述べていきます。

(教会成長研究院)

(1) 「メシヤ」と「真の父母」の概念について——真のお母様もメシヤである

^{ムンヒョンデ}文亨進様は、真のお母様に対し「お

母様ご自身を神やメシヤと呼び、従順な対象の位置を離れました。メシヤの血統以外は全てサタンの血統です。サタンの血統である韓^{カン}氏族の血統を、お母様は神の血統と宣言し、お父様の玉座に座るようになった」と述べ、お母様はメシヤではないと批判しておられます。

以下、この問題をどう考えるべきかについて応答いたします。

『原理講論』には「メシヤは人類の真の父母として来られなければならない」とい(二七七ページ)と明記されていま

す。また、八大教材・教本『天聖經』一九一ページの見出しには「メシヤは『真の父母』である」とあり、真のお父様は「メシヤは真の父母です」(一九二ページ)と語っておられます。したがって統一原理においては、メシヤとは「真の父」と「真の母」の両者を指して語る言葉であると言えます。

ところが、同じ八大教材・教本『天聖經』一九二ページで、真のお父様は「メシヤは男性です」とも語っておられます。一見すると、「メシヤは真の父母」という説明と矛盾^{ムジダ}したことを語っておられるように思われますが、「メシヤは男性です」という言葉も正しく、矛盾ではありません。その点を明確に

整理しておかなければなりません。矛盾のように思える同様の名言として、八大教材・教本『天聖經』には、次のようなみ言があります。

「アダムとエバが偽りの父母になったために、そのような父母がいまいませんでした。それで、真の父母が出てこなければなりません。真の父母が歴史上に出てこなければならぬのです。そのような歴史的使命を代行する一つの名詞をかぶせて呼ぶ、その存在とは誰でしょうか。これが『救世主』という存在であり、『メシヤ』という存在です。……その救いを成してあげるには、メシヤはどのような存在として来なければならぬでしょうか。間違いなく、真の父母として来なければなりません。メシヤは、真の父母として来なければなりません。イエス様を、キリスト教ではメシヤ、救世主として信じます。真の父母として来るには、どのように来なければならぬでしょうか。一人では駄目^{ダメ}なのです。(まず)真なる父に代わり得る、一人の男性として出てこなければなりません。今まで、数多く

の宗教は、一人の男性を探してきたのです。……それゆえ、神様の前において、『私は独り子だ』とイエス様が言われたのです。独り子が出てきたのに、独り子が一人で暮らしたなら大変です。(そこには)独り娘がいなければなりません。それで、独り娘を探して、神様を中心として、独り子と独り娘が互いに好む場で結婚しなければならぬのです。……それが『小羊の婚宴』です』(一七六―一七七ページ)

このみ言にも「真の父母」すなわち二人という概念と、「一人の男性」という違った概念が出てきます。従来のキリスト教では、イエス様お一人をメシヤであると考えてきました。このように男一人であつたとしても、イエス様はメシヤとして来られたと言えます。しかし、イエス様が神のみ旨を果たそうとすれば、一人でその使命を果たすことはできません。

なぜなら、メシヤは「人間始祖」の立場で来られ、アダムとエバが墮落することで果たせなかった創造理想である神のみ旨を、人間始祖の立場で成し

遂げなければならぬためです。それゆえ、メシヤは「真の父母」でなければならぬのです。

真のお父様は「神のみ旨とは何か」について、次のように定義しておられます。

「神様のみ旨は四位基台を完成することです。……四位基台とは、神様を中心とするアダムとエバが、神様の愛の圏で離れようとしても離れないように完全に一つとなり、理想的な夫婦となり、彼らが子女を繁殖することによってつくられる神様中心の家庭の基台をいいます」(『祝福家庭と理想天国』(I) 四〇二―四〇三ページ)

メシヤはまず男性として来られますが、そのメシヤが神のみ旨である「家庭的四位基台」を成し遂げるには、必ず真の母を立てて「真の父母」とならなければなりません。したがって統一原理では、メシヤがメシヤの使命を果たすためには、真の父母にならなければならぬと主張しているのであり、そういう意味から「真の母」も「真の父」

と共にメシヤにならなければならないと考えているのです。

文亨進様は「お母様はメシヤではない」と批判し、「真のお母様は、真のお父様に代わって自分がメシヤになろうとしている」かのように述べられますが、お母様は「お父様に代わってメシヤになろうとしている」のではなく、すでに「お母様も、お父様と共にメシヤになっておられる」のです。事実、

お父様は一九九二年八月二十四日、第一回「世界文化体育大典」の祝賀晩餐会^{ばんさんかい}で、全世界に向かって「私と妻の韓鶴子女史^{ハングジャ}は、人類の真の父母であり、救世主・再臨主であり、メシヤであると宣布します」と発表しておられます。このように、お父様のメシヤ宣布にはお母様が含まれています。

真のお父様は、「それではメシヤ思想の核心とは何でしょうか。それは世界を救い、統一させるための思想であり、本然の理想家庭を建設することのできる教えであり、人間始祖が墮落によって失ってしまった位置である真の父母の立場を取り戻すことです」(二〇〇一年一月二十二日、『真の家庭と世界平和』

五二二ページ）と語っておられますが、まさしく「真の父母」になるべきだったアダムとエバの立場を取り戻すのがメシヤであり、それが「真の父母」です。

「救世主とは何ですか？ 救世主の責任は、個人を救うことだけではありません。救世主の家庭を救わなければなりません。家庭を救うより救世主の国を救い、それより救世主の世界を救い、救世主の天地、救世主の主人たる神様を解放しなければなりませんのです。」

宗教を信ずる人の中に、『私一人、天国に行こう』と言う人がいますが、それは困ります。妻が夫を天国に送り、夫に従っていくと言わなければならないのであって、夫をほったらかしにして、『私だけ行きます』と言うことはできません。家庭を天国に送り、天国に行こうとするのが統一教会の人々です。……メシヤの責任がそれです。……個人を天国に送り、家庭を天国に送り、氏族を天国に送り……地獄にいるすべての万民まで解放させて天国にみな送り、『神様のすべての悲しいことを私がみな責任を負います』と言う、そのよ

うな責任を負って来られた方がメシヤです。……個人のメシヤになると言って個人の十字架を負うメシヤは必要ありません。家庭メシヤになれないのです。そうならば、家庭メシヤを再び探し求めなければなりません。家庭メシヤになったならば、氏族メシヤを再び探し求めなければなりません。……このように個人、家庭、氏族を代表して中心になり得る救世主の責任を背負った……これがメシヤだということです』（『宗族的メシヤ』五二―五三ページ）

このように、メシヤは個人メシヤとして、まず「男性」として来られます。そのメシヤが、家庭メシヤ、氏族メシヤ、国家メシヤ、宇宙メシヤとしての使命を果たし、神様まで解放しようとされます。そのためには、そこに必ず本然の「エバ」がいなければなりません。すなわち、勝利した家庭メシヤ以上の立場になるためには、「真の父母」でなければならぬということです。ですから、私たちは、メシヤは「真の父母」だと言うのです。真のお父様が一九九二年八月二十四日になされた「メ

シヤ宣布」に真のお母様が含まれているように、お母様も「メシヤ」なのです。

（２）「メシヤの血統は文氏であって韓氏ではない」という批判への応答——正確な「血統」理解に基づく批判

文亨進様は、「メシヤの血統以外は全てサタンの血統です。サタンの血統である韓氏族の血統を、お母様は神の血統と宣言し、お父様の玉座に座るようになりました」と述べ、真のお母様を批判しておられます。

以下、この問題について応答します。真のお母様を批判する人々の多くは、男性だけが「神の血統」を持っていると考える傾向にあります。そこで、「血統」の概念を正しく知らなければなりません。

真のお父様は、男性と女性の両性の「生命」が関わって血統が生じることに ついて、次のように語っておられます。

「生命を見ましたか？ 生命に触ってみましたか？ 生命体は見えるけど、生命は分かりません。触ってみること

はできません。血統もそうです。血統は夫婦が愛するその密室、奥の部屋で結ばれるのです。そして、精子と卵子が出合って生命体として結合するとき、血統が連結されるのです」(「ファミリー」一九九五年三月号、二二ページ)

「一人で血統が連結されますか？」

この血統は、男性の血だけでは連結できません。男性と女性が一つにならなければなりません」(「ファミリー」二〇〇一年三月号、二二ページ)

「皆さんが父母から受け継いだ命は、父の精子と母の卵子を受け継いだところから出発したのです。その卵子と精子が一つになったところに、愛によって根が生まれて発生したのが、皆さんの子女です」(「ファミリー」二〇〇七年三月号、七ページ)

真のお父様は、父母から子女への生命の連結、すなわち「血統」に対して、それは精子と卵子が一つとなることから出発したと、生物学的に述べておられます。ただし、精子と卵子の生物学

的次元の指摘だけでなく、さらに深く考察され、「愛によって根が生まれて発生した」と「愛」を強調しておられます。

神様の血統に連結するか、サタンの血統に連結するかという問題は、この「愛」を認識しなければなりません。

真のお父様は、平和メッセージにおいて「生命と愛が合わさって創造されるものが血統です」(「平和神経」二八ページ)、「血統は、父母が子女だけに与え得る特権中の特権です」(同、三九ページ)と語っておられますが、血統は男女による両性の「生命」を抜きにして生じることはありません。すなわち「生命がなくても、愛がなくても血統は創造されません。愛、生命、血統のうち、その実りが血統なのです」(同、二八ページ)とあるとおりです。

ところで、文氏の家系の中からメシヤが誕生されました。しかし、その家系においては、真のお父様だけが「無原罪」であり、それ以前の文氏の家系の人々、および直接の肉のご両親である文慶裕・忠父様、金慶継・忠母様も共に原罪を持っておられます。した

がって、それらの人々は、厳密に言う

と神の血統ではありません。同じように、イエス様の場合も、イエス様は「無原罪」ですが、肉親である聖母マリヤやザカリヤには原罪があります。したがって、それらの人々も、厳密に言う神の血統ではありません。それゆえ、厳密に表現するならば、神の血統の始まりとなるべきであったお

かたは、第二アダムであるイエス様ご自身だけであり、そして神の血統の始まりとなられたおかたは第三アダムである文先生ご自身であると言わなければなりません。

したがって、人類歴史において神の血統の出発点となったおかたこそが、人間始祖の立場である真の父母様であり、そこから神の血統が発出したのです。

すなわち、神の血統が発出するには、「真の父」だけでなく「真の母」がいなければなりません。そこには、人間始祖の立場としてのエバがどうしても必要不可欠なのです。イエス様は、新婦(真の母)を立てられなかったために、神の血統を出発させることができませんでした。したがって、イエス様は神の

血統の始まりとなるべきだったおかたという立場で、その生涯路程を終えられました。

しかし、真のお父様の場合は、**人類の真の母である韓鶴子夫人を立てることができたので**、神の血統の始まりとなったおかたとなられ、祝福結婚によって人類を重生させる「真の父母」となられました。したがって、「文氏」（真の父）と「韓氏」（真の母）のおふたりによって、「神の血統を発させていかれた」というのが、正しい理解であり、より正確な表現であると言えます。

したがって、サンクチュアリ教会を支持する人々が主張する「メシヤの血統はあくまで文氏であり韓氏ではありません」という表現は、いろいろな意味で正しいものとは言えません。

一方、「メシヤの血統以外は全てサタンの血統です」という主張は、正しいものではありませんが、厳密な意味で使用するべき言葉です。すなわち、メシヤが「真の父母」となって神の血統を発させるまでは、人類歴史においては、全ての人々がサタンの血統、すなわち墮落の血統だったのであって、それは

メシヤを誕生させた文氏の家系においても同じであることを踏まえたうえで、この問題について考え、慎重に「発言」しなければならぬと言えます。

したがって、文亨進様がなされる批判は不正確な内容であり、誤りです。

（３）独自の「祝福式」を行っている問題に対する応答——血統伝授は父母だけの特権

現在、サンクチュアリ教会では「真の神様と真のお父様の権威の下に戻るための祝福式」と題して独自の「祝福式」を行っており、「二〇一六年のお父様のご聖誕日までにサンクチュアリ教会の祝福を受けなければならない」と主張しています。彼らは、「真のお父様の聖和後、真のお母様の下で行われた祝福式は『サタン主管下の祝福』である」と批判します。

この問題を原理的にどう考えるべきでしょうか。まず、サンクチュアリ教会で行っている「祝福式」は、今までの聖酒と違った「独自の聖酒」を作っているという問題があります。

聖酒について、真のお父様は次のように語っておられます。

「聖酒は、ただ作られるものではありません。ただそのまま、できるのではないということです。サタンと神様の立ち会いのもとに、霊界にいる数多くの天使たちの立ち会いのもとに作られるのです。……聖酒を作る時は、霊界の霊人たちが来て、『頼むから一杯だけ注いで自分に飲ませてくれ』と強要します。聖酒を飲めば、復帰されることを知っているからです。それで、群れになって来て、しきりに『自分たちにも恵みをくれ』と言います。先生にはそれができる、ということを知っているのです。……『君たちは待ちなさい』と言って、苦勞した皆さんに与えたのです」（八大教材・教本『天聖經』一二四三ページ）

霊人たちが来て、しきりに「飲ませてくれ」と騒ぐほどに、聖酒は歴史的価値があるものです。それは、人間始祖の立場で勝利された真の父母様の勝利権によって作られたものだからです。

この聖酒式は血統転換の式です。

「聖酒式は何をするものでしょうか。新しい愛を中心として神様の体を自分の体の中に投入させる儀式です。堕落した体は一つしかないので、神様の愛を中心として取り替えるのです。これが正に聖酒式だということです。イエス様が、『パンは私の体を象徴するものであり、ぶどう酒は私の血を象徴するものなので、あなた方はそれをもらって食べ、飲まなければならぬ』と語ったのと同じように、愛を中心として、神様の実体を中心として、新しい血統を受け継いで**原罪を洗い清め得る式**です。この式を経ずしては、祝福の場に行けないのです。ですから**この式は、血統を転換させる式です**」(同、一二四一～一二四二ページ)

人間始祖アダムとエバは、堕落することによって「神の血統」を失ってしまいました。その失った「神の血統」を、人間始祖の立場で勝利された真の父母様が、血統転換の式である聖酒式を通じて、私たちに伝授してくださるのです。

真のお父様は、平和メッセージで、「**天の真の血統をもつてこられた真の父母様を通して、祝福結婚を受けることが、正に真のオリーブの木に接ぎ木される恩賜です。……血統は、父母が子女だけに与える特権中の特権です。……真の父母様が許諾された聖酒式を通して血統転換をし……真の家庭を探し立てられる道が大きく開かれました**」(『平和神経』三四～四〇ページ)と語っておられますが、真の父母様によって作られた「聖酒」を用いて行うところにこそ、「祝福」の意義と価値があります。天一国聖酒は、真のお父様が聖とされる前に、地上において作ってくださったものであり、たとえお父様が霊界に行かれた後であっても、その勝利権は永遠であり、今も有効です。これは、キリスト教においても、イエス様が「昇天」されて霊界に行かれた後も、パンとぶどう酒による「**聖餐式**」で、霊的救いの恩恵が二千年間与え続けられていることと同じです。

したがって、「真のお父様の聖和後、真のお母様の下で行われた祝福式は『サタン主管下の祝福』というものでは、

決してありません。これは、完全な誤りです。

また、真のお父様が、「**血統は、父母が子女だけに与える特権中の特権です**」と語っておられるように、血統とは、あくまでも「父母」が伝授して下さる特権なのであって、子女によって与えられるものではありません。すなわち、「血統転換」や「血統の伝授」という特権を持つておられるかたは、どこまでも「真の父」と「真の母」、すなわち真の父母様だけであり、決して子女様ではありません。

ところが、サンクチュアリ教会では「独自の聖酒」を用いているのみならず、天一国聖酒を用いた「祝福式」の主礼の権限も、真の父母様から委譲されていません。ですから、彼らが行う祝福式は非原理的な祝福式であり、無効で全く意味がありません。

(4)「真のお母様は、真のお父様と一体となっていない」という批判への応答(注：この問題は、No2の小冊子で、より詳しく扱います。)

サンチュアリ教会側は、二〇一二年

一月十九日、真のお父様が、天正宮博物館の訓読会で「お母様は、お父様とは違う別の道を行っている。お父様の話を聞かず、お母様が『私の言葉を聞きなさい!』とするのは、ルーシエルよりももっと恐ろしい存在だ。そんなお母様に従う者は小鬼だ。こいつら」と語られたと述べ、「真のお母様を真のお父様の前に立たせ、その後ろには石俊溪、尹晶老、黄善祚、金孝律の四人を立て、絶対服従を誓う儀式をされたらしい」、「お父様はお母様に対し、『ルーシエルよりも悪い。別の道を行っている』と言って叱責されているので、『最終一体』となっていると言いたい」と批判しています。

この問題について応答いたします。二〇一二年一月十九日に起こったという伝聞に基づいて、真のお母様は、真のお父様と一体化していないのだと即断することはできません。お母様が勝利されたのか、そうでないのかを、最終的に判断されるのは、神様とお父様しかおられません。私たちの次元で判断することは絶対にできないと言える

でしょう。

儀式があったとされるのは、二〇一二年一月十九日ですが、その後、真のお父様は、真のお母様と共に同年三月二十四日（天暦三月三日）、韓国・清平の清心平和ワールドセンターで、「天人真の父母勝利解放完成開門時代祝福式」を挙行しておられます。

もし、真のお母様が「ルーシエルよりももっと恐ろしい存在」であつたらば、真のお父様は、お母様を立てて、おふたりで「祝福式」の主札をされなかつたでしょう。

また、真のお父様は、同年四月十四日（天暦三月二十四日）、米国・ラスベガスの天和宮で訓読会を終えられた後、「特別宣布式」を挙行されました。その宣布式で、お父様は次のように祈っておられます。

「真の父母様になることができる文鮮明、韓鶴子という二人の人が、堕落が存在しないエデンの園にあつて、『善悪の果を食べたら、死ぬであろう』と言われた、それ以前の位置に返っていき……統一的な家庭に一つの中心、一

体圏を成して、天の勝利の覇権的主権と天国を完成した、この全てを喜びとして歓迎いたします。……ここに、お母様とお父様がこのみ旨に従って苦勞したことを感謝しながら、全ての順序を天の前にこの時間、きれいに整理し、ささげる記念の時間として受け取られ、天に奉獻、敬拝することのできるこの時間を持ちましたので、お父様、喜びでこの時間をお受け取りください!」(トウデイズ・ワールドジャパン) 二〇一二年六月十日号、一八ページ)

そして、真のお母様に対して、「お母様、ご苦勞様! お父様の前に挨拶して……」と語られ、真のお父様はお母様の敬拝を受けられたうえで、『創造主の権限を再び回復された、神様の絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準を中心として、天人真の父母定着実体み言宣布天宙大会を最終完成・完結する、こ

とを、お父様の前に奉獻しますので、お受け取りください』と祈られました。

ここで、真のお父様は、『堕落が存在しないエデンの園にあつて、『善悪の果を食べたら、死ぬであろう』と言われ

た、それ以前の位置に返って、「天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会を最終完成・完結することをお父様の前に奉獻します」と祈られて、お父様と真のお母様のおふたりが最終完成・完結したことを天の前に宣布し、奉獻しておられます。

また、同年七月十六日（天暦五月二十七日）には、清心平和ワールドセクターで「アベル女性UN創設大会」を挙行され、真のお父様は、真のお母様を総裁として立てられました。もし、お母様がお父様に反逆しておられ、失敗しておられるなら、お父様はあえてお母様を総裁として立てられなかったことでしょう。

もし、真のお父様が、真のお母様を失敗したかたであると判断されていたなら、人類救済に執念を燃やし、全生涯を神様の解放のためにささげてこられたお父様であられるがゆえに、人類救済に対して責任を持たれた立場から、お母様に代わる人類の「真の母」を、誰か他に立てておられたものと思われる。しかし、お父様は、最後の最後までお母様を立てられたのであり、お

母様との間で次のように会話されました。

『私（お母様）は、お父様と約束しました。『どんなにみ旨が大変でも、自分の代で終わらせませう』と言いました。そして、お父様に『神様の創造目的を、創造理想世界を成し遂げてさしあげます』と言いました。……そのために、私は変わらないでしょう。お父様が逝かれる前、お父様は私に……『本当にすまない、本当にありがとう』とおっしゃいました。私は、皆さんと一緒に、お父様が残されたみ旨を成し遂げてさしあげたいのです。落伍者となる息子、娘がいらないことを願います。それが、私の願いでもあります。お父様も願われることです』（『真の父母經』一五〇二―一五〇三ページ）

以上のようなやり取りが、真のお父様と真のお母様の間であったことを考えると、最後の最後までお父様はお母様を立てておられるのであり、お母様に対して「み旨成就」を託してから聖和していかれたことが分かります。こ

れらの事実を踏まえて考えると、お父様とお母様は、完全一体となっておられるのです。

（5）「真のお母様は完成しておられない」という批判への応答

サンクチュアリ教会側は、二〇〇七年五月十一日、真のお父様が「今やお母様は二〇一三年六月十六日までに自分を完成させねばなりません」と語られたと主張し、「基元節の時点において、『お母様は完成していない』と批判しています。

この問題について応答いたします。韓国語のみ言の原文を見ると、「お母様は、今や二〇一三年二月十六日まで」にそのことを完成しなければなりません（二〇〇七年五月十一日）となっており、真のお母様ご自身のことを指して「完成させる」と語っておられるのではありません。しかも、期限となる日付の「二〇一三年二月十六日までに」が、「二〇一三年六月十六日までに」となっており、基元節（陽暦二月二十二日）よりも遅い日付に変更されています。

この批判は、^{ことば}み言の不正確な引用に基づいて行われているものであり、稚拙な批判です。

(6) 真のお母様が真のお父様の椅子に座られたことに対する批判への応答

文亨進様は、「真のお母様は(自分を)神の血統と宣言し、真のお父様の玉座に座るようになりました」と言つて、批判されています。そして、お母様がお父様の椅子に座っておられる写真を見せ、「お父様の座を奪おうとしている」かのように批判しておられます。

真のお父様は、「すでに真の父母様ご夫妻は最終一体を成して、完成、完結、完了の基準で、全体、全般、全権、全能の時代を奉獻宣布されたのです」(「トゥデイズ・ワールドジャパン」二〇一一年七月一日号、二〇ページ)と語って宣布しておられますが、そのみ言に基づいて、真のお父様と真のお母様が「最終一体」となれたと確信する食口ならば、信仰的な立場から「お母様は同じ椅子に座られるほどにお父様を慕っておられ、一体化しておられ

るのだ」と捉えます。

ところが、サンクチュアリ教会を支持する人々が、その同じ場面を見たとき、「真のお母様は真のお父様の座を奪おうとしている」と批判してしまうのは、お母様を「不信の目」で見ているからに他なりません。

一般の社会でも、亡き伴侶を本当に慕って愛していた人であればあるほど、最愛の人の「残り香」がある場所には触れたいと願うことでしょう。そして、いつまでもそこに居たいとまで思うものです。

ましてや「空前絶後」の永遠なる唯一の真の父母様です。完全一体となっておられるがゆえに、そのようなことをなされていると見るべきでしょう。そのような、慕わしい目、信仰の目によって、真のお母様を見つめることができるようになることを願います。

(7) 四位基台の図で、アダムとエバの位置が逆転している問題——これは、主管性転倒を意味するものではない

サンクチュアリ教会側は次のような批判をしています。

「四位基台の図を書くとき、主体であるアダムを左、エバを右に書く。ところが、現在の原理講義(成約摂理解説)では、エバを左、アダムを右に書いている。これは主管性転倒である」

彼らはこのようにして、真のお母様が真のお父様を主管性転倒しようとなさっているかのように印象づけようとしています。

この件について応答いたします。インターネットで公開されている「成約摂理解説」の講義案で用いられた図(図1を参照)は、二〇一四年と年数が表記されてこそいますが、一九九四年に周藤健先生(四十三家庭)が、真のお父様のご指導を受けて作成していたものです。この図は、お父様ご自身が書かれた板書をそのまま講義案にしたものであり、今の時代圏において登場したものではありません。二十数年前の十六万訪韓セミナー(済州島)のときに作成されたものです。お父様は、神様の方に向かってアダムが右、エバが左と説明されたとのことでした。し

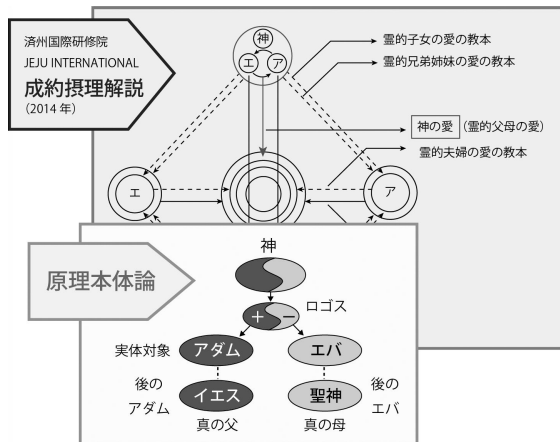
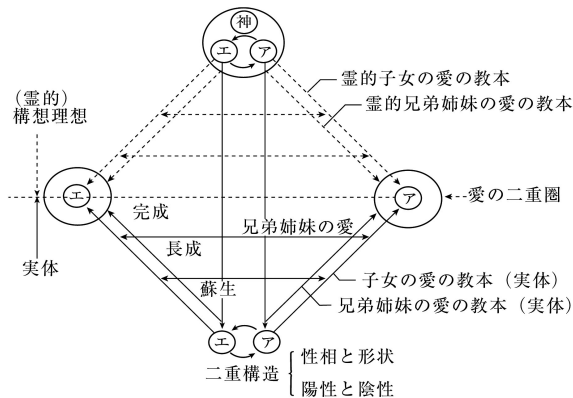


図 1

たがって、この図は**主管性転倒**をしている**というのではなく**。事実、一九九六年に製本された周藤健著「成約摂理解説」にはこれと同様の図が掲載されています（【図2】を参照）。

ところで、従来の講義案は、神様を背にしてアダムを左、エバを右に書いていたために、神様に向かって左右の位置を逆転させると、現場が大変混乱してしまう恐れがありました。そのため、日本の現場の講師は済州島修練会

図 2



周藤健著「成約摂理解説」(28 ページ、1996 年)

で作成された講義案を採用することができず、日本で普及することはなかったのです。またこの十六万訪韓セミナーは日本の婦人だけを対象とした修練会であり、韓国および世界の教会員は参加していなかったことから、世界的に普及することもありませんでした。

サンクチュアリ教会側はこれらの事実を確認せずに、アダムとエバの位置が反対になっていることをもって、真のお母様が真のお父様を**主管性転倒**し

ようとなさっているかのように印象づけようとしているのです。

ところで、サンクチュアリ教会側は、アダムとエバの位置が逆転していることのみならず、アダムと天使長を丸で囲った図（【図3】を参照）に対しても、「日本教会では、堕落がまず天使長とアダムの間で起こったと教育している」と言って批判しています。つまり、堕落が「同性愛」の問題だと講義しているのです。この批判も、彼らが事実を確認せずに、かつてな想像に基づいて行っているものにすぎません。

成約摂理解説の講義は、『原理講論』の「堕落の動機と経路」と同じであり、当然、まず天使長ルーシエルとエバの間で「霊的堕落」が起こり、次にエバとアダムの間で「肉の堕落」が起こったと説明しています。したがって、彼らの批判はいいかげんなものです。

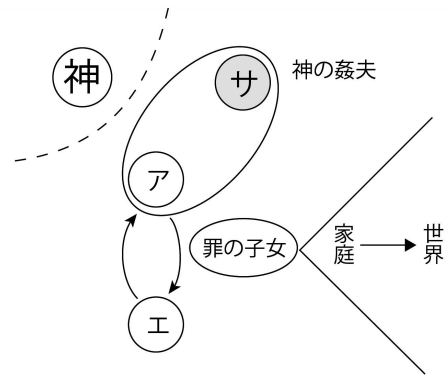
この図は、霊的堕落をしたエバが天使長の妻（妾）の立場に立つようになり、次に、肉の堕落によってアダムを堕落させることで、堕落アダムをサタンの「息子」（庶子）の立場に生み変えたことを表しています。堕落エバが、アダ

ムをサタンの息子の立場に生み変えたことについて、真のお父様は次のように語っておられます。

「堕落の責任は、サタンを中心として、エバから始まり、アダムに移りました。すなわち、偽りの生命の種を受けたエバの立場からすれば、神様に代わって**サタンが父の位置**でエバと一体となつて、アダムを生んだ立場となり堕落がなされました。こうしてエバは、天使長とアダムを各々**父と息子のような立場に立てて堕落した**」（天一国経典『平和經』九〇八ページ）

【図3】（注：サタンとアダムを丸で囲んでいる部分）は、肉的堕落をすること、堕落した天使長とアダムの間に「偽りの父子関係」（参考：ヨハネ八・44）が成立し、アダムが「サタンの実体」という立場に立ったことを意味しています。そして、そのサタンの実体の立場である堕落アダムの汚れた種が、堕落エバの胎中に蒔かれ、サタンの血統を持った子女が繁殖するようになったというのが、この図の意味するもの

図 3



「成約摂理解説」の講義案に含まれている図

なのです。

ちなみに、サタンのところに「神の姦夫」と表記されていますが、この表記についても「そのような表現は初めて聞いた」と批判するサンクチュアリ教会側の人物がいます。しかし、この「姦夫」という言葉は、真のお父様が語っておられるみ言です。

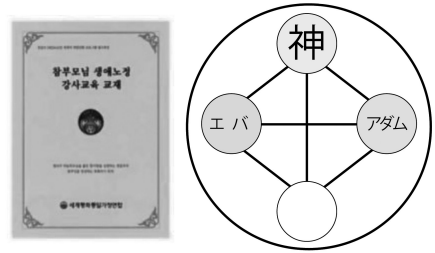
例えば、真のお父様は平和メッセージで、「（人間始祖が堕落すること）でその場に現れたのは、偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統でした。神様の愛と生命と血統が愛の怨讐である**姦夫、サタン**の所有権のもとに落ちてしまったのです」（『平和神經』二九～三〇ページ）

ジ）、また、別のみ言でも「サタンとは誰ですか。**神様の姦夫です**」（八大教材・教本『天聖經』一七二ページ）などと語っておられます。

ところで、二〇一五年に行われた「世界指導者会議」で配布された資料の一部に、アダムとエバの位置を左右に逆転させた四位基台の図が含まれていました（【図4】参照）。この図は、作業をした韓国のかたが「人為的ミス」をすること、原本のハングル（注：アダムが左、エバが右になっている）とは違って、アダムとすべきところが日本語の「エバ」となり、エバとすべきところが日本語の「アダム」となってしまうもので、その資料がサンクチュアリ教会側に伝わって騒ぎとなりました。しかし、それはあくまでも「人為的ミス」だったのであり、済州島修練会の講義案とは関係がありません。（ただし、その作業をした韓国のかたは、もしかしたら済州島の講義案を見る機会があつて、それを参考にしてそのように逆転させるミスをしてしまったのかもしれない。）

いずれにせよ、一九九三年十月から

図 4



2015年の世界指導者会議で配布された資料に含まれていた図

一九九四年十一月にかけて行われた十六万訪韓セミナーのときに作成された成約摂理解説の講義案は、真のお父様のご指導によって**神様の方に向かって**アダムを右、エバを左に逆転させて書かれていたのです。

(8)「私を教育した人は誰もいません……私が決心したのです」の意味について

二〇一四年十月二十七日に、真のお母様が「私を教育した人は誰もいません。独り息子(独り子)、独り娘は同等なのです。独り息子が独り娘を教育したとは言えません。どのような意味か

分かりますか?……私が決心したのです」と語られたことに対して、サンクチュアリ教会側の人たちは、「真のお父様のみ言と食い違うことを語っている」と、お母様を批判します。

この問題について応答いたします。確かに、真のお父様は「純真無垢な女性を、全ての女性たちの上に立てようとするのですから、**先生がひとりで教育しなければなりません**」(一九九四年三月二十日)、あるいは「お母様はお父様についてきます。絶対服従すれば通ずるんです。堕落したのは何かというと、エバがアダムを主管したのが堕落である。復帰されるには、**アダムに完全に主管されなければならない**」(一九六七年六月十二日)と語っておられます。真のお母様を批判する人たちは、「真のお母様はそれらの真のお父様のみ言と食い違うことを語っている」と言うのです。

しかしながら、真のお母様が歩まれた道は、このみ言と矛盾するものではありませんでした。お母様は、勝利した「人類の真の母」となっていられるために、神様と真のお父様のみ前に絶

対信仰、絶対愛、絶対服従の基準を貫きながら、み旨の道をひたすら歩んで行われました。お父様は、次のように語っておられます。

「アダムを中心として女性を創造した時と同じように、天の男性を中心として女性を再創造するのです。……世界的な女性完成圏を代表した一人を中心として創造するのです。それを成し遂げてこられた方が**お母様**です。先生のあとにびったりとくっついてきたのです」(『真の父母の絶対価値と民族的メシヤの道』七七ページ)

「お母様は私(真のお父様)の影のようです。付いて回る影のようなので、私は実体をもった主体の教主であり、お母様は対象の教主です。それで、私は**第一教主、お母様は第二教主**です。何を中心としますか。愛を中心としてそうだということです」(同、一一六ページ)

これらのみ言に表現されているように、真のお母様は真のお父様に従って、「びったりとくっついて来た」「付いて

「回る影のように」という絶対服従の道を歩まれながら、お父様から『第二教主』と呼ばれる位置まで勝利していかれました。そのように歩まれた道について、お父様の側から見れば、間違いなく「アダムがエバを再創造した」「お父様がお母様を教育した」ということが言えるでしょう。

しかしながら、人類の「真の母」が歩まれる道は、絶対信仰を持つて従ったとしても、そう簡単に勝利できる道ではなかったのです。真のお父様は、真のお母様が歩まれた道について次のようにも語っておられます。

「（一九六〇年からの）七年間というものは、実に様々な非難、中傷、うわさ、誤解が、先生一家をめぐって渦まいていました。非難、中傷、迫害によって血を流す思いの期間でしたが、それらのすべてが必要なことだったのです。問題は、お母様がこのような試練に耐えて、非難されてもそれを克服し、のり越えていけるかどうかということでした。当時のお母様の立場の難しさが想像できるでしょう。そしてお母様

はすべてに勝利したのです。……何事が起ころうともお母様は、たえず不屈の信仰で忍耐され、犠牲になりながら沈黙を守り通して、先生への信仰を持ち続けました。……これらの事情については、けっして二人の間で話し合われることはなく、『さあ、お母様、あなたはそれを理解し、勝ちぬき、不屈の忍耐で勝利しなければなりません。私はそれをこういう計画を成就するため、こういう目的に基づいてそうしたのだから。』というような説明はたった一言もしませんでした。

先生がお母様に説明し、慰めたとしたら、たとえお母様がそのために勝利したとしても、何の価値もないのです。お母様自ら意味を悟って、自分自身の理解に基づいて、忍耐し勝利しなければならぬのです。先生は、今、みなに明かしているこの程度にも、お母様に説明したことはないのです」（「祝福」一九七七年夏季号、五九〜六一ページ）

真のお父様が、「お母様自ら意味を悟って、自分自身の理解に基づいて、忍耐し勝利しなければならぬ」と語っ

ておられるように、あえて、教えたり、教育したりすることができない道だったのです。そういう意味で、真のお母様は並々ならぬ命懸けの決意をもって、真の母としての道を歩まれ、自ら悟ってその道を開拓していかれたのです。

真のお母様が語られた「私を教育した人は誰もいません。……どのような意味か分かりますか？……私が決心したのです」というみ言は、そのような観点から語られたものであると言えます。

したがって、真のお父様が語っておられる「先生がひとりで教育しなければなりません」、「復帰されるには、（エバは）アダムに完全に主管されなければならぬ」というみ言と、真のお母様が語っておられるみ言は、見つめる観点が違うというだけであって、矛盾するものではないのです。

（9）八大教材・教本『天聖經』を改竄したという批判への応答

文亨進様は、二〇一五年七月十九日の説教で「お母様の指導のもと、『天聖經』は八〇パーセント変えられた」と

語り、『天聖經』を改竄したと批判しておられます。

しかし、この批判は事実に戻します。八大教材・教本『天聖經』と天^{てん}一^{いち}国^{こく}経^{けい}典^{てん}『天聖經』は明確に区別されており、別のものです。今も八大教材・教本『天聖經』は各家庭で大切にされ、訓読されています。

どちらの『天聖經』も真のお父様の名言です。天一国経典『天聖經』は八大教材・教本『天聖經』と同様に、『文^{ぶん}鮮^{せん}明^{めい}先生^{せんせい}マルスム選集』からみ言を抽出して編纂されたものであり、み言の改竄などしていません。

また、天一国経典『天聖經』は八大教材・教本を生命視しています。その一四四九ページには、八大教材・教本について「獄苦を経ながらも……準備した遺言書です。永遠の人類の教材、教本として……皆様が霊界に入っているとしても読み、学ばなければならぬ本です」と語られたみ言が収録されています。このみ言が収録されている理由は八大教材・教本を重要視しているからです。

もし、八大教材・教本『天聖經』を

軽んじて改竄する意図があれば、八大教材・教本を回収し廃棄したでしょう。

しかしそれは廃棄されず、今もそのみ言がさまざまな出版物に引用されています。八大教材・教本が改竄された事実はありません。

また、八大教材・教本『天聖經』には二〇〇〇年以降のみ言がほとんど収録されています。真のお父様の聖和後、真のお母様は二〇〇〇年以降のみ言を含めた生涯全体のみ言を整理していかれました。そのようにして「八大教材・教本」以外のみ言を集めることで、分派が「み言集」を作成してかつて公表し、分裂と混乱を引き起こすことを未然に防ぐことになったのです。実際に、真のお父様の聖和後、「み言集を出そう」と準備していた霊的集団があります。

ところで、真のお父様は「先生が生涯全体の結実として宣布したみ言、それが『天地人真の父母定着実体み言宣布^{ふんぷ}宇宙大会^{うちゅうたいかい}です」(二〇一一年二月三日)」と語られましたが、この結実のみ言は八大教材・教本『天聖經』に含まれていませんでした。このみ言が天一

国経典に収録されたのは、未来永劫にみ言の伝統を残していくためです。

また、天一国時代に関する重要なみ言である「基元節」「天地人真の父母様」「天曆」「後天時代」「安侍日^{あんしにち}」「天一国憲法(教会法)」「禧年^{ヒニオン}」「聖和」「アーヂュ」等々が八大教材・教本『天聖經』には一言もありませんでした。真のお父様は次のように語っておられます。

「先生が語ったことを整理して逝かねばなりません。それゆえ、『天聖經』を中心としたものをつくったのです。(八大教材・教本『天聖經』は)今まで出版した先生の説教集四百八十巻の中から抜き出した言葉です。その三倍が、まだ発表されていない『天聖經』二巻、あるいは三巻となりえるものが待っています」(二〇〇八年九月二十五日)

このみ言にあるように、真のお父様の編纂されていないみ言を『天聖經』二巻、三巻として後世へ残していかねければなりません。真のお母様はこのお父様の願いに従って、お父様がみ言を出発されてから「すべて成し遂げま

した」という最後の祈禱に至るまで、全生涯路程のみ言を網羅した天一国經典『天聖經』を編纂されたのです。

また、『平和經』についてですが、真のお父様は生涯にわたって数多くの講演会をされました。その講演文も未整理状態でしたが、『平和經』には約百八十篇の講演文が収録されています。人類に向かって宣布された講演文が一冊に整理されたことは歴史的価値のある偉業です。

さらに、『真の父母經』についてですが、神様や人類の最大の関心は真の父母です。真のお父様は「先生が生きているときは、先生の歴史を書きませんが、先生が死んだ後には先生の歴史を書くでしょう」(一九七〇年八月十一日)と語っておられました。真のお母様はこのみ言に従って、真の父母様の生涯路程と業績を体系的にまとめる作業をされました。それを成しえるおかたは、お母様以外におられません。

(10)「聖婚問答」を変えたという批判への応答

文亨進様は、「お母様の指導のもと……聖婚問答も変えられた」と語り、真のお母様を批判しておられます。

この問題について応答いたします。以前の「聖婚問答」は次のようになっています。

「一、あなたがたは、神様の創造理想を完成する成熟した善男善女として、永遠なる夫婦の因縁を結ぶことを神様と真の父母様の前に約束しますか。」

二、あなたがたは、真の夫婦となり、今後子女たちをみ旨にかなうように養育し、統一家庭と人類と神様の前に必要とされる指導者を養成することを約束しますか。

三、あなたがたは、真の父母様を中心として、統一家庭の伝統を受け継ぎ、後代の統一家庭の後孫たちと人類の前に誇り得る伝統を伝授することを約束しますか。

四、あなたがたは、創造理想を中心として、神様と真の父母様のみ旨を受け継ぎ、神様の四大心情圏と三大王権的伝統を確立し、神様と真の父母様とともに世界の人々を愛し、地上天国建設と天上天国建設の基本となる理想的

家庭を形成することを約束しますか」

上記の内容が、現在では次のようになっています。

「あなたがたは、天の父母様の創造理想を完成する善男善女として、永遠なる夫婦の因縁を結び、天地人真の父母様が立てられた伝統を受け継ぎ、天一国が目指す理想家庭を完成することを約束しますか」

両者を比較すると、四つの内容が、簡潔に一つにまとめられたのが分かります。

すなわち、一の「成熟した善男善女として永遠なる夫婦の因縁を結ぶ」が、「天の父母様の創造理想を完成する善男善女として永遠なる夫婦の因縁を結び」に。二の「子女たちを……神様の前に必要とされる指導者として養成」が、「(子女を教育し)天一国が目指す理想家庭を完成する」に。三の「真の父母様を中心として統一家庭の伝統を受け継ぎ」が、「天地人真の父母様が立てられた伝統を受け継ぎ」に。四の「地上天国建設と天上天国建設の基本となる理想的家庭を形成」が、「天一国が目指す理想家庭を完成する」に、それぞれ対

応しており、実に簡潔にまとめられています。

しかも、聖婚問答が「統一家」という**特定の人々**だけに限らず、全人類に適応される内容となっています。このように見ていくと、現在の聖婚問答は、基元節を迎え、天地人真の父母様の時代的勝利圏に従って変化したものであり、万民が人種、民族、文化の壁を越えて理解し、天一国完成後においても永遠に誓いうる、より普遍的な「宣誓文」になっていることが分かります。

(11) 神様の呼び名を、「天のお父様」から「**天の父母様**」に変えたという批判への応答

文亨進様は、「お母様の指導のもと……(神様を『天の父母様』と呼び)一神教を二元論に変えた」と述べ、真のお母様を批判しておられます。

この問題について応答いたします。真のお父様は二〇一〇年一月一日午前零時の祈禱において、**「愛する天の父母様」**地上に相対的立場に立った地上の父母様を一体化させて天正宮博物館

を建て、天の内外のあらゆる苦痛の道、嘆息の道を除去させるために」と祈っておられます。すなわち「天の父母様」とは、お父様ご自身が唯一なる神々に対して用いておられた呼び名であり、しかも一つの概念です。父と母とを分離させ、二つに分けて語っておられるではありません。

また、『原理講論』においても、「神を父母として侍り」(三三三ページ)、「神御自身が父母となられ」(三四ページ)、「父母なる神は」(六一ページ)、「人間の父母としていまし給う神」(九二ページ)「天の父母なる神」(二三三ページ)等々、神様が父母であられることを明確に述べています。

ところで、真のお父様は、人間の成長過程と、人生の目標について次のように語っておられます。

「幼児が成長したのちに結婚をするということ、これは、夫婦の位置を尋ね求めていくことであり、父母の位置を尋ね求めていくことです。神様と一体になる位置を尋ね求めていく道です」(八大教材・教本『天聖經』二三三六ページ)

この人間の成長が、神様とどう関係しているのかを理解しなければなりません。真のお父様は次のように語っておられます。

「人間創造とは、神様ご自身が成長してきたことを実際に再度展開させてきたものです」(同、一五九〇ページ)

「神様も赤ん坊のような時があり、兄弟のような時があり、夫婦のような時があり、父母のような時があったので、(人間を)そのように創造されたのです」(同、一五九一ページ)

従来の神学では、神様を「永遠不変の絶対者」としてのみ捉え、「神の成長」という概念を知りませんでした。しかし、「わたしと父とは一つ」(ヨハネ一〇・30)と語られたイエス様は、聖書を見れば分かるように、幼児期、少年期、青年期、成人期と成長していました。

「神様と一体になる位置を尋ね求めていく道」が人生であるなら、神様とイ

エス様の願いは、さらに結婚をし、人
類の「真の父母」になることであった
と言わざるをえません。真のお父様は、
アダムとエバの結婚式は「神様の結婚
式」でもあったと語っておられます。

「横的な父母であるアダム・エバは神
様の体であり、縦的な父母であられる
神様が心なのです。……ここで心と体
が一つになって愛するとき、アダム・
エバの結婚式は「体的な父母の結婚
式であると同時に、心的な神様の
結婚式になるのです」(「ファミリー」
一九九九年一月号、二二ページ)

「アダムとエバが真の愛で完成する
ことは、まさに神様が実体を身にま
とう願いが成就するのです。……アダ
ムとエバが善なる子女をもって真の父
母になることは、まさに神様が永存の父
母の位を実体的に確定(すること
で「祝福家庭と理想天国」(二九ペ
ージ))

ここにおいて、「神様が永存の父母の
位を実体的に確定」すると語っておら

れるように、神様の願いは「天の父母様」
になることでした。

二〇一三年の基元節を機に、神様の
呼び名が「天の父母様」になりました
が、それは、真の父母様が「最終一体」
を成し遂げ、摂理の「完成、完結、完了」
を宣布する勝利圏を立てておられたが
ゆえに可能だったのです。

真のお父様は、これまで、神様を
「**囹圄の神**」「**鼓子の神**」と語ってお
られましたが、神様は解放され、さら
に人類子女たちに対する真の父母とし
ての責任を果たされることによって、
ついに「**天の父母様**」となられたのです。
また、真のお父様は、神様の血統の
出発について次のように語っておられ
ます。

「アダムとエバが神様を中心とした真
の愛の夫婦となれば、神様は理想ど
おりに、ご自身の実体であるアダムの体
の中にいましたまいながら、エバを愛
されるようになるのです。さらには、
アダムとエバは神様の実体をまとった
真の父母となって、善なる愛、善なる
生命、善なる血統の出発となったこと

でしょう」(同、三一―三二ページ)

一言に「**四大心情圏と三大王権を完
成した家庭が、理想的な家庭**」(八大
教材・教本『**天聖經**』一三四四―
一三四五ページ)とあるように、**三大王権(三代圏)**の
完成が理想家庭であるならば、それは、
男女が結婚して夫婦となり、子女がで
きて父母となり、さらにその子女が結
婚して孫が生まれ、祖父母となり、そ
の孫の結婚までを含め、真の家庭の「**三
代圏の完成**」を指します。

しかし、『**原理講論**』に「**イエスと聖
霊とは、神を中心とする霊的な三位一
体をつくることによって、霊的眞の父
母の使命を果たしただけで終わった**」
(二六八ページ)とあるように、**イエス
様は「個人路程」を歩まれましたが、
結婚できなかったため、「家庭路程」を
歩むことはできませんでした。**

それゆえ、真の父母様が歩まれた
一九六〇年天曆三月十六日の「**聖婚式**」
から二〇一三年天曆一月十三日の「**基
元節**」までの神様の摂理は、真の父母
様が「真の父母」として成長し、完成
していかれる「**家庭路程**」、ひいては「**天**

宙的路程^グであつたと捉えることができます。同時にそれは、神様が「天の父母様」になられる成長過程であつたと言えるのです。

「基元節」は、神様の結婚式を祝賀し、天^{てんいちこく}一国を実体的に出発する起点となる日です（天^{てんいちこく}一国經典『天聖經』一三七四ページ）。したがって「基元節」を機に、神様を「天の父母様」と呼ぶようになったのは、神様が長い歴史において切望してこられた^グ父母になりたい^グという切なる願いがかなつたことを意味するのです。

(12) 「天^{てんいちこく}一国の歌を変えた」という批判への応答

文亨進様は、二〇一五年七月十九日の説教で「お母様の指導のもと、天^{てんいちこく}一国の歌が変えられた」と述べて、真のお母様を批判しておられます。

この件について応答いたします。真のお父様は二〇〇六年六月、聖歌三番（日本の聖歌四番）の「栄光の賜物」を天^{てんいちこく}一国の歌に制定されました。ところが、極めて残念なことに、韓国と日本

ではこの聖歌のメロディーが異なっており、国際集会などで歌うとき、歌がそろわないという現象が頻繁に起こりました。

歌の乱れは^グ国歌^グの威厳を傷つけます。韓日一体は天^{てんいちこく}一国にとって極めて重要であり、真のお父様は韓日一体を切に願われました。真のお母様はお父様のその願いを受け、母の国を愛され、韓日一体化をさらに強固にしておられます。

真のお父様はまた、天^{てんいちこく}一国の歌の制定のとき、国花（バラとユリ）、国鳥（鶴）、天^{てんいちこく}一国旗なども定められました。が、「基元節」を機にそれらの内容を全て盛り込んだ新しい天^{てんいちこく}一国の歌がつくられました。それは、人類が願う自由・平和・統一・幸福の恒久的価値を謳^{うた}い、天地人真の父母様をたたえ、天^{てんいちこく}一国ビジョンと願いが五大洋六大州、宇宙に満ちることを祈る内容です。

現在の天^{てんいちこく}一国の歌は、韓日間で一致し、韓日間における歌の乱れもなく、その歌詞も^グ国歌^グとして意識を高揚させるものであり、韓日一体化をさらに確かなものになっています。真のお父

様が制定された天^{てんいちこく}一国の内容の全てを盛り込んだ天^{てんいちこく}一国の歌を具現化されるかたは、真のお母様以外にはおられません。

そして、当然のことながら、真のお父様が作詞された「栄光の賜物」「聖励の新歌」は永遠の聖歌として今後も歌い続けられるものであり、今も集会などで歌われています。

(13) 「天^{てんいちこく}基元年」を「天^{てんいちこく}一国元年」に変えた」という批判への応答

サンクチュアリ教会を支持するある人物は、真のお父様が二〇一〇年に定められた「天^{てんいちこく}基元年」の年号が、真のお母様によって「天^{てんいちこく}基が、『天^{てんいちこく}一国元年』に改められた。お父様の立てられた伝統がお母様によって覆^{くわ}されている」と批判しています。

この件について応答いたします。真のお父様は二〇一〇年に「天^{てんいちこく}基元年」を宣布されました。そして二〇一三年の「基元節」を機に、真のお母様は「天^{てんいちこく}一元年」を宣布されましたが、それはお父様の願いに基づくものであり、

批判すべきことではありません。お父様が進められた天の摂理は、常にお母様の勝利圏と共にあった事実を踏まえて、このことの理解を深めなければならぬと言えます。

かつて、真のお父様は一九七七年二月二十三日のご聖誕日に「天紀元年」を発表されました。その日は「地勝日（天地勝利の日）」でもあり、次のようにみ言を語られました。

「陰暦の一九七七年の一月六日は私と妻の誕生日であり、また歴史的な新紀元年（天紀元年）を発表した日として、全員でそれを祝いました。全宇宙も祝ってくれます。事実なのです。それは天宙の新紀元が始まるからです。きょう、妻は三十四歳を越えます。イエス様は、三十三歳以上行くことができませんでした。イエス様は、三十四歳の誕生日を神と共に祝いたかったのです。しかし、十字架のゆえにできませんでした。今年、妻は、三十四歳を越え、イエス様の三十三歳を越えていくことになりました。ですから、そういう意味でも、きょうは最も記念すべき日なのです」（祝

福家庭と理想天国Ⅱ）五五七～五五八ページ）

真のお父様は一九九三年に「成約時代」を宣布され、「成約時代」として数えていかれましたが、その年の「父母の日」に次のように語られました。

「きょうは第三十四回父母の日です。三十三周年です。三十三は完成を意味します。それは、きょうの父母の日はイエス様の年齢だということです。イエス様は、三十三歳の時に家庭をなすはずでしたが、十字架上で亡くなり、その立場をなせませんでした」（「祝福」一九九三年夏季号、五五ページ）

そして、真のお父様はイースト・ガーデンで特別なお祝いをされ、真のお母様に指輪を贈られましたが、そのお祝いについて次のように語られました。

「この前、イエス様の三十三回目の誕生日を祝いましたね。……それで先生は、イエス様を解放して、イエス様が家庭を持つて四十三歳（お母様の還暦

の二〇〇三年）になるまでに、完全な世界的基盤をつくらなければならぬので、急いでいるのです」（「ファミリー」一九九三年九月号、三五ページ）

真のお父様は二〇〇一年一月十三日、清平で「神様王権即位式」を挙行され、「天一国時代」を宣布。「天一国」として数えていかれました。そして、「二〇〇一年一月十三日を中心として、天一国一年、二年、三年に、天一国開門祝福聖婚式（二度目の結婚式）をしました。祝福聖婚式をしたので、天一国家庭において、真の父母が王の位置に立つことができるのです。それで、天宙・天地父母が四位基台を備え得る位置に立つて天国に入っていくることにより、天国が開いて心情的な一体圏ができるのです」（「後天時代の生活信仰」五九ページ）と語られました。二〇〇三年は真のお母様の還暦でもあります。そして、この二度目の結婚式は、アダムとエバが墮落せずに完成したなら行はずの「神様の結婚式」であり、お父様は「婚姻申告」「出生申告」をされました。この二度目の結婚

式によって、神様は文鮮明先生と韓鶴子夫人の姿をもつて顕現されるようになったと語られました(「ファミリー」二〇〇三年五月号、二五～二七ページ)。お父様とお母様のおふたりは、神様の**実体**の立場に立つておられるのです。

真のお父様は二〇一〇年二月十四日、第四十三回「真の神の日」「神様王権即位式九周年」に天曆を発表され、「天基」として数えていかれました。そして、「一九四五年から七年間の一九五二年に終わるはずでしたが、キリスト教とカイン・アベルの国、諸宗教が一つになって文総裁に反対し……歴史が延長したのです。二〇一三年一月十三日は、天、一、国、の起源となる日です。……摂理がかかっているその日まで、その期間内に教育を完了し……すべてのことが終わるのです」(二〇一〇年二月十四日)と語られました。

以上、述べてきたように、真のお父様は真のお母様と共に「天紀」「成約時代」「天一国時代」「天基」を数えていかれましたが、「二〇一三年一月十三日は、**天一国の起源となる日です**」と語っておられたように、お母様が「基元節」

をもって「天一国元年」を発表され、そこから「天一国」として数えていかれることは、お父様のみに基づいたもののなのです。

(14)「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が相続すると書かれたところはない」という批判への応答

サンクチュアリ教会を支持するある人は、「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が相続することについて書かれているところはありません」と述べ、真のお母様が、真のお父様の聖和後、祝福家庭をはじめ食口を指導することに対して批判します。

しかし、この主張は、聖書に対する無知が生み出した誤った考え方です。聖書には、イエス様が十字架で亡くなった後、霊的真的母である「聖霊」が信徒たちを導いて指導していくことについて明確に記されており、しかも「聖霊によらなければ、だれも『イエスを主である』と言うことができない」(コリント一二・3)とあります。

イエス様は十字架で亡くなる前に、

十字架と復活の後、聖霊(霊的真的母)が信徒を導くことについて次のように語っておられました。「父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであらう。……助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであらう」(ヨハネ一四・16・26)と。

また、復活した後、イエス様は弟子たちに現れ、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて……地のはてまで、わたし(イエス)の証人となるであらう」(使徒行伝一・8)とも語っておられました。これらのイエス様の預言どおり、ペンテコステ以降は、聖霊がイエス様と共にあつてクリスチャンを導いていくようになりました。

「原理」が教えているように、霊的真的母である「聖霊」を通じてこそ、クリスチャンは霊的に重生されます。前述したとおり、聖書には「聖霊によらなければ、だれも『イエスを主である』と言うことができない」とあり、さら

に「聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである」(テトス三・5)とも書かれています。

このように「重生」の役事は、真の父だけで成されるのではなく、必ず真の母を通じなければなりません。ゆえに、イエス様は、「人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであらう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」(マタイ二二・32)と警告しておられるのです。

イエス様は、地上での肉身生活において、実体の真の母を復帰することができませんでした。それゆえ原罪を清算することができず、十字架と復活の後、霊的な真の母である聖霊と共に「霊的重生」の役事だけを行うようになりました。新約時代は、霊的救いのみで終わったのです。

しかし、再臨主であられる真のお父様は、実体の真の母を復帰され、原罪を清算する道を開かれました。それゆえ成約時代、天一国時代を迎えることができたのです。『原理講論』に、「イエス再臨以後の完成成約時代は、妻の

時代、すなわち、雌牛の時代であることを知らなければならぬ。ゆえに、雌牛は、とりもなおさず、完成を象徴するのである」(三二一ページ)と説明されていますが、そこには示唆に富んだ意味深いものがあります。二千年のキリスト教の歴史は、イエス様と聖霊が導いたことを知らなければなりません。

(15)「二〇一三年、基元節の祝福指輪には、お母様の名前だけが刻まれている」という批判への応答

亨進様は、「二〇一三年、基元節の祝福の時、このようなことが起こっていたとは、私たちも知りませんでした。祝福指輪の内側に、お母様の名前だけが刻まれているのです。お父様の名前が祝福指輪から消されてしまいました」と述べ、真のお母様を批判しておられます。また、サンクチュアリ教会側の人々たちも、「お母様のサインを入れたものは、『呪いを象徴』している。直ちに外し、刻印を消すまで身につけないように」と批判しています。

この件について応答いたします。こ



の批判は、事実関係を確認せずに行っている無責任な批判にすぎません。この指輪に刻まれた真のお母様のサイン(写真参照)は、真の父母様の「正式認可」をアピールするために指輪会社が入れたものです。指輪会社は次のようにコメントしています。

「二〇〇七年頃、真の父母様に指輪のデザインを決めていただく際に、お母様がこれがいいと決めてくださり、サインを下さいました。それ以降、そのデザインで指輪を製作してきましたが、二〇一三年、さらに安く指輪を販売する非公式会社と競争になり、正統性をアピールするために、頂いたサインを刻んだものです」

このように、真のお母様の名前の刻印は、二〇〇七年頃に真の父母様によって選んでいただいた際に、お母様がサインしておられたその文字を、指輪会社がその正統性をアピールするために刻印したものです。真のお父様の名前が消されたという事実はありません。したがって、「お父様の名前が祝福指輪から消されてしまいました」という批判は誤りです。

これは、あくまでも指輪会社が、この指輪は真の父母様を選ばれたものであるというその正統性をアピールするために刻印したものです。

この祝福指輪は、真のお父様と真のお母様のおふたりで決めてくださった貴い価値のあるものであり、『呪いを象徴』している。直ちに外し、刻印を消すまで身につけないように」というのは、とんでもない批判です。このような誤った批判に惑わされてはなりません。

(16)「ハンナムドン漢南洞の父母様の写真を全部下ろして、お母様の写真だけを掲げさせた」という批判への応答



注…2枚の写真を見比べてみると、サンクチュアリ教会側が批判に用いている写真に写ってはいませんが、お供え物が並べられている正面側には、真の父母様のお写真が掲げられていることが分かります。





サンクチュアリ教会側の人たちは、
 「漢南洞の父母様の写真を全部下ろして、
 お母様の写真だけを掲げさせた」と批判
 判しています。それに同調する人のブ
 ログには、基元節のお写真が掲げられ
 た場面を紹介し【写真1参照】、「この
 写真は、韓国ソウル龍山区漢南洞の文家
 所有の建物で行なわれた礼拝（聖和し
 た真の子女追悼礼拝）」の「コマである。
 ……朴インソプ氏の上に飾られている肖
 像画をよ〜く見てもらいたい。韓鶴子氏
 だけで、文鮮明氏がいない！ 鮮が消
 されているのだ」と批判しています。

これらの批判に対して応答します。

これは事実確認せずに行っている無責
 任な批判です。実際には、漢南洞（漢
 南国際研修院）の各部屋に真の父母様
 のお写真が飾られています【写真2、
 7参照】。私たちは、このような事実
 に反する批判に惑わされてはなりません。

（17）家庭連合のマークに対する批判
 への応答

サンクチュアリ教会側の人たちは、
 家庭連合マークに対し、それがヨハネ



の黙示録一七章に出てくる「赤い獣」を表すマークであると批判します。ヨハネの黙示録一七章三節には「ひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣は神を汚すかずかずの名でおおわれ、また、それに七つの頭と十の角とがあった」と書かれています。それが家庭連合マークだと主張しているのです。家庭連合マークは、統一マークと同様に、真のお父様が定めてくださり、天的な公認を受けたものです。事実、

二〇〇三年二月六日、真のお父様が「神様の結婚式」と語られた、いわゆる「二度目の聖婚式」において、真の父母様は統一マークと共に家庭連合マークを掲げておられます【写真8参照】。家庭連合マークを批判することは、それを定められた真のお父様を批判することにほかなりません。

(18) その他の批判を含めて、総合的に留意すべきこと——真のお父様の「意向

① お父様の願いは、お母様を絶対中心として一つになること

「伝統はただ一つ！ 真のお父様を中心として！ 他の誰かの、どんな話にも影響されてはいけません。先生が教えた御言と先生の原理の御言以外には、どんな話にも従ってはならないのです。今、先生を中心としてお母様を立てました。先生が霊界に行ったら**ば、お母様を絶対中心として、絶対的に一つにならなければなりません。**今、お母様が行く道は、お父様が今まで立てた御言と説教集を中心として、行かなければならないのです」(「祝福」

一九九五年夏季号、六八ページ)

「私が死んでも(お母様には)統一教会を導くことができる能力もあるの

で、お母様が説教する時が来るのです。……そのような時は、(お母様に)絶対服従しなくてはなりません。……一度決心すれば、最後まで自分一代でこの複雑な恨の峠をすべて清算するという決心が、私よりもお母様がもっと強いのです。先生は、今七十を超えたので、ごみ箱の近くに行きましたが、お母様は、今ごみ箱を收拾してそれですべて掃除することができた主人になったので、先生よりもお母様をもっと重要視することが出来る統一教会の食口になれば福を受けるのです」(『真の御父母様の生涯路程』⑩「三五一―三五二ページ」)

② 真のお母様は「第二教主」

「これからは先生がいなくても、お母様一人のみ旨に何の支障もないというのです。今までは、女性が天地を代表する摂理の代表者として立つことはできなかったのですが、父母の愛と一体的理想を中心として、初めてお母様

を中心とする女性全体の解放圏が地上に宣布されたのです。……真の父母の聖婚から三十年たつて女性解放を宣布したというのです。ですから、先生が一人でいても真の父母様の代身であり、**お母様が一人でいても真の父母様の代身です。**『レバレンド・ムーンが古希を過ぎて七十を越えたので後継者が現れないのか?』そんな言葉はやめなさい。……ですから、先生が第一教主、その次に、**お母様は第二教主**だということです」(マルスム選集二〇一―一二六)

「**お母様を中心として皆さんが一体になつていかなければならない時**が来ました。もう先生がいなくても、**お母様が代わり**にできる**特権を許諾**したというのです。お父様がいないときは、お母様のことを思わなければなりません。そのように理解して、先生の代わりにお母様に侍る心もち、祈禱もそのようにするのです。今までは先生を愛してきましたが、**これからはお母様を愛さなければなりません。**これからは**お母様の時代**に入っていくことを理解して、特に女性たちはそのようにしなけ

ればなりません。ここにおいて、先生が第一教主であれば、**お母様は第二教主**であると世界的に宣布し、天地に宣布します」(『真の父母の絶対価値と民族的メシヤの道』一一六―一二七ページ)

「お母様は私の影のようです。付いて回る影のようなので、私は実体をもつた主体の教主であり、**お母様は対象の教主**です。それで、私は第一教主、**お母様は第二教主**です。何を中心としてですか。愛を中心としてそうかどうかというのです」(同、一二六ページ)

「先生が**霊界**に行ったとしても、**お母様が地上**にいれば、**霊界と地上界の統一圏**ができるので、いつでも**お母様が**いる地上に来て一緒に暮らすことができるのです。今、統一教会のメンバーの中にそのようなカプブルがたくさんいます。一緒に生活しているのです。……**霊界に行ったとしても、地上にいる人と一緒に生活することができ**るのです」(同、一二七ページ)

真のお父様は、聖和後、真のお母様のところに降りてこれ共に生活する

と公式的に宣言しておられました。真の子女様のところに降りてこれれると語られたではありません。私たちは、お父様が霊界から降りてこれられて生活すると語られたお母様を中心に一体化していかなければなりません。

③ 真の父母は永遠に一組である

「真の父母様は一組だけです。今、この時の一度だけだということです。過去にもいなかったものであり、未来にもいません。真の父母様が肉身をもつて実体で存在するのは、この時だけだということです。永遠の中でたった一度です」(マルスム選集二四六―八四)

「先生は、以前にも存在しなかったものであり、これからも存在しません。永遠にこの時しかないということです。真の父母が二組もいることができますか。**絶対に一組です。**先生が**霊界**に行けば終わりです。永遠に存在しません。だからといって、この思想がなくなるのでしょうか。そうではありません。先生が教えたあらゆることは、天の真理として永遠に残るのです」(同、

二二九―一六一)

「真の父母が二組いることはできません。……人類の父母が一度現れるのが、歴史の願いであり……摂理の願いであるために、その父母が現れる時は、あとにも先にもない時であり、歴史上に一度しかない頂上なのです」(八大教材・教本『天聖經』二三〇ページ)

「真の父母というのは一組しかないのです。人類の一組しかない父母だということです。歴史に初めて登場した、空前絶後の真の父母が顕現した時代が成約時代だということです」(同、二四〇ページ)

「真の父母というのは、二組はあり得ません。一組しかないのです。過去には存在せず、現在に一組だけ存在し、後代にも存在しません。歴史上に一組しかない父母の名をもつ真の父母が現れたという事実は、歴史上、これ以上で喜べることはない出来事です」(マルスム選集二六六―二五二)

このように、真の父母は永遠に一組しかおられません。それゆえ、真のお父様は「後継者……そんな言葉はやめなさい」と語っておられるのです。『原理講論』に、「イエス以後においては、イエスと聖霊とが、直接、信徒たちを導かれた」(四六九ページ)とあるように、二千年のキリスト教は、霊的眞の父母であられるイエス様と聖霊が一貫して信徒を導きました。

未来永劫にわたる天てんいちこく一國において、空前絶後の眞の父母であられる文ぶん鮮明シミン先生、韓鶴子夫人ハンハクチャが一貫して導いていかれることを、私たちは明確に理解しておかなければなりません。

**サンクチュアリ教会を
支持する人々の言説の誤り No.1** 定価(本体 100 円 + 税)

2017年3月3日 初版第1刷発行

発行 世界平和統一家庭連合
発売 株式会社 光言社
〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町 37-18
電話 03 (3467) 3105
<https://www.kogensha.jp>
印刷 株式会社 ユニバーサル企画

©FFWPU2017 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

